

平成18年度

市原市内遺跡発掘調査報告

棗 塚 遺 跡
海士遺跡群三入道地区
稻荷台遺跡L地点
姉崎二子塚古墳

2007

市原市教育委員会

平成18年度

市原市内遺跡発掘調査報告

なつめ づか 遺 跡
あ ま さん に ゆ う ど う
棗 塚 遺 跡 群 三 入 道 地 区
い な り だ い
稲 荷 台 遺 跡 L 地 点
あ ね さ き ふ た ご づ か
姉 崎 二 子 塚 古 墳

2007

市原市教育委員会

序 文

市原市は、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、約3万年前の旧石器時代から人々の生活の舞台となってまいりました。そこで本市は「王賜」銘鉄剣や国指定史跡上総国分寺跡、上総国分尼寺跡などに代表される埋蔵文化財の宝庫として知られています。

一方、本市は首都圏に位置し、交通の便もよいことから、高度経済成長期には住宅団地やゴルフ場造成などの大規模開発の波が押し寄せ、国分寺台地区に代表されるような大規模な遺跡の発掘調査が行なわれ、多くの貴重な成果がもたらされると共に、失われた遺跡も少なくありません。現在は、このような大規模開発の波は沈静化しつつありますが、本市としては、活力ある地域経済・文化を創造していくために、今後とも地域基盤の整備も進めていかなければなりません。こうしたなかで、文化財の保護と開発との調和を図りつつ、この地に住んだ先人たちが育んだ歴史的文化遺産を保護し、後世に伝えるべく努力しているところであります。

本報告書は、平成18年度に国及び県の補助を受けて実施した、個人住宅の建設などに伴う市内所在遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。本書が学術資料としてはもとより、より多くの市民によって、郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の保護とその重要性を理解するための資料として、広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで、ご指導・ご協力いただきました文化庁記念物課、千葉県教育庁文化財課をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

市原市教育委員会
教育長 山中 齊

例 言

- 1 本書は、国庫および県費の補助をうけて、市原市教育委員会が主体となり実施した、市原市内に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業、報告書刊行は市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターが行なった。
- 3 本報告書所収の調査は以下の通りであり、所在地、調査原因等は巻末の報告書抄録に記載した。
 - (1) 棗塚遺跡（調査コード セ405）本調査63㎡
調査期間 平成18年5月18日～平成18年6月5日 担当 近藤 敏
 - (2) 海士遺跡群三入道地区（調査コード セ406）対象面積1,303㎡ 確認調査130.3㎡
調査期間 平成18年6月1日～平成18年6月8日 担当 近藤 敏
 - (3) 稲荷台遺跡L地点（調査コード セ410）対象面積3,500㎡ 確認調査350㎡
調査期間 平成18年9月13日～平成18年10月14日 担当 近藤 敏
 - (4) 姉崎二子塚古墳（調査コード セ415）対象面積1,227㎡ 確認調査135㎡
調査期間 平成18年11月20日～平成18年12月11日 担当 木對和紀
- 4 整理作業・原稿執筆は、姉崎二子塚古墳については木對が行ない、棗塚遺跡の動物遺存体については、鶴岡英一が行ない、他の整理作業および本書の編集は高橋康男が行ない、遺物写真の撮影は近藤が行なった。なお、中世遺物については櫻井敦史の協力を得た。
- 5 各遺跡の調査に際しては、姉崎二子塚古墳以外は基準点測量を実施していない。図中に示す座標値および北は遺跡近隣の既知点をもとに図上で求めたものであり、厳密なものではない。なお、座標値は旧系を使用している。

本文目次

1 調査遺跡の位置と概要	1	4 稲荷台遺跡L地点	13
2 棗塚遺跡	2	5 姉崎二子塚古墳	20
3 海士遺跡群三入道地区	9		

挿図目次

第1図 平成18年度市内遺跡発掘調査遺跡位置図	1	第14図 出土遺物(3)	19
第2図 棗塚遺跡調査位置図	3	第15図 姉崎二子塚古墳調査位置図	20
第3図 棗塚遺跡全体図	4	第16図 姉崎二子塚古墳	21
第4図 出土遺物	5	第17図 トレンチ配置図(1)	22
第5図 海士遺跡群三入道地区周辺地形図	9	第18図 トレンチ配置図(2)	24
第6図 海士遺跡群三入道地区全体図	10	第19図 土層断面図	25
第7図 主要トレンチ土層断面	11	第20図 出土遺物実測図(1)	26
第8図 出土遺物	12	第21図 出土遺物実測図(2)	27
第9図 稲荷台遺跡全体図	14	第22図 出土遺物実測図(3)	28
第10図 稲荷台遺跡L地点全体図・土層断面図(1)	15	第23図 出土遺物実測図(4)	29
第11図 土層断面図(2)	16	第24図 姉崎二子塚古墳復元図	29
第12図 出土遺物(1)	17		
第13図 出土遺物(2)	18	写真図版目次	
		1：棗塚遺跡 2：海士遺跡群三入道地区	
		3：稲荷台遺跡L地点 4：姉崎二子塚古墳	
		5～9：遺物	

1 調査遺跡の位置と概要

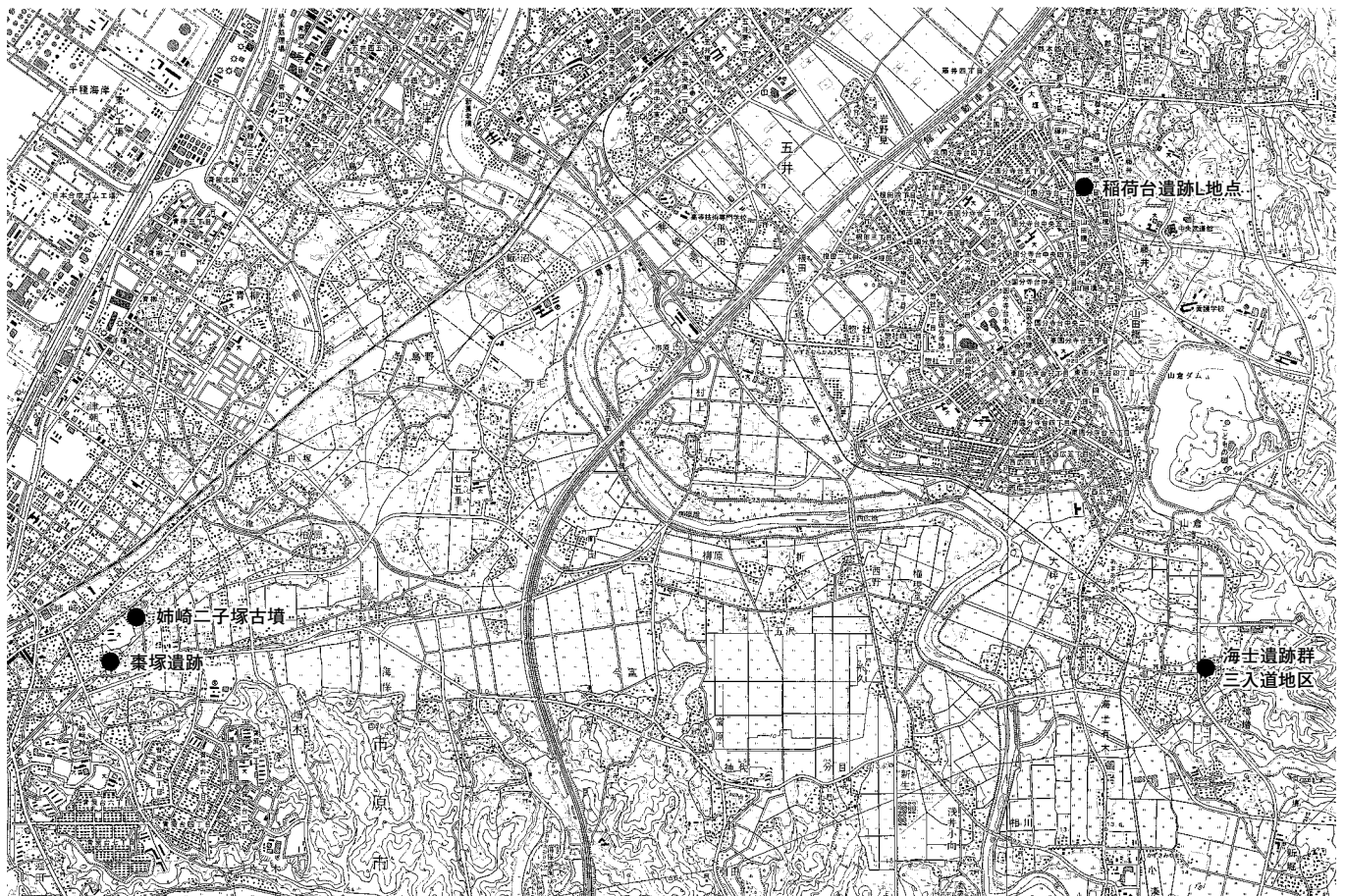
今回、市内遺跡発掘調査事業で発掘調査を実施した遺跡は、4箇所である。姉崎地区2箇所、国分寺台地区1箇所、福増地区1箇所、全体的に市の北部に集中する傾向がある。いわゆるバブル経済の崩壊とともに、開発が沈滞する傾向にあったが、昨今の経済状況の持ち直しとともに、住宅建設や店舗の建設が増加傾向にあり、今年度の事業もそのような情勢の反映とみられる部分もある。

棗塚遺跡は、標高7m前後の砂堆上に残された遺跡で、これまで3次にわたる調査が実施されており、今回の調査は第4次にあたる。1次・2次調査は都市計画道路の建設に先行して実施されたもので、中世の貝層や土壙墓群、道路跡の検出など、これまで知られていなかった低地上での中世の歴史を考える上での貴重な資料が得られている。

海士遺跡群三入道地区は、養老川中流右岸の標高約24mの台地上の遺跡である。遺跡を含む一帯は海士遺跡群として大きく括られているが、近隣での調査歴は必ずしも多くなく、歴史像を明らかにするには、まだ時間がかかる地域といえる。

稲荷台遺跡L地点は、平成14年度に調査報告書が刊行された稲荷台遺跡本体の北方約200mの台地の縁にあたる部分で稲荷台遺跡全体の広がりを考える上で重要な部分であった。

姉崎二子塚古墳は棗塚遺跡に近接する、千葉県指定文化財でもある前方後円墳である。今回の確認調査は、地権者の協力のもと古墳の保存を目的に墳丘外側の状況を把握するために行なった。



第1図 平成18年度市内遺跡発掘調査 遺跡位置図 (1/5万) 国土地理院発行2万5千分の1地形図「五井」「蘇我」「姉崎」「海士有木」を使用

2 棗塚遺跡

遺跡の位置 棗塚遺跡は、東京湾に面した標高約7m前後の砂堆上に存在する。都市計画道路八幡椎津線の建設に先行して、平成8・9年度に発掘調査が行なわれ、それまで存在の知られていなかった、中世の貝塚や土壙墓群、鎌倉街道との関連をうかがわせる道路跡などが検出されている。館跡や城郭などとは異なった中世の一面を知るうえで重要な位置を占めている遺跡である。

平成17年度には、都市計画道路に隣接する部分で個人住宅建設に先行して、発掘調査が実施され、密度はやや薄いものの中世の土坑群が広がっていることが確認されている。

調査概要 今回の調査に先立って、教育委員会ふるさと文化課による試掘が行なわれており、2箇所の試掘トレンチのうち、西側のトレンチで貝層が確認された。その結果を受け、個人住宅建築予定地全域につき本調査を実施するところとなったものである。

調査地点の基本層序は、上層から、Ⅰ山砂を主とする客土、Ⅱ暗灰色粘質土（旧水田耕作土）、Ⅲ灰色粘質土（貝肥が点在する）、Ⅳ暗灰色粘質土、Ⅴ黒色粘質砂質土、Ⅵ青灰色砂となっていた。なお、Ⅴ層は窪地に特有の土層であった。重機による表土除去をⅣ層まで進めた段階でⅤ層・Ⅵ層が露出し始め、Ⅴ層から遺物が出土し始めたので、この時点で重機による作業を終了した。この段階で一旦清掃作業を行なったが、遺構の確認はできなかつたため、以後手作業によりⅤ層を少しずつ掘り下げ、Ⅵ層を遺構確認面として遺構の捕捉を行なった。確認面の標高は5.4m前後であり、湧水が甚だしく、常にポンプで水を汲み上げながらの作業となった。

検出遺構 調査の結果、図示したように貝層、土壙墓、土坑群の存在が明らかになった。土坑はわずかに方形を呈するものも見られたが、概して不整形のものが多く規模も一律ではなかった。確認面からの掘り込みはいずれも浅く、10cmに満たないものがほとんどであった。

土壙墓（4号遺構）は調査区西壁際で検出されたもので、全体の規模等は復元しがたい。数点の小児骨を伴っている。また、出土位置は不明であるが、銭が3枚重ねられた状態で出土している。土層観察によると遺物包含層を切っているが、Ⅳ層には覆われているところから他の土坑群よりも相対的には新しいものの、大きく時期を隔てるものではないと考えておきたい。

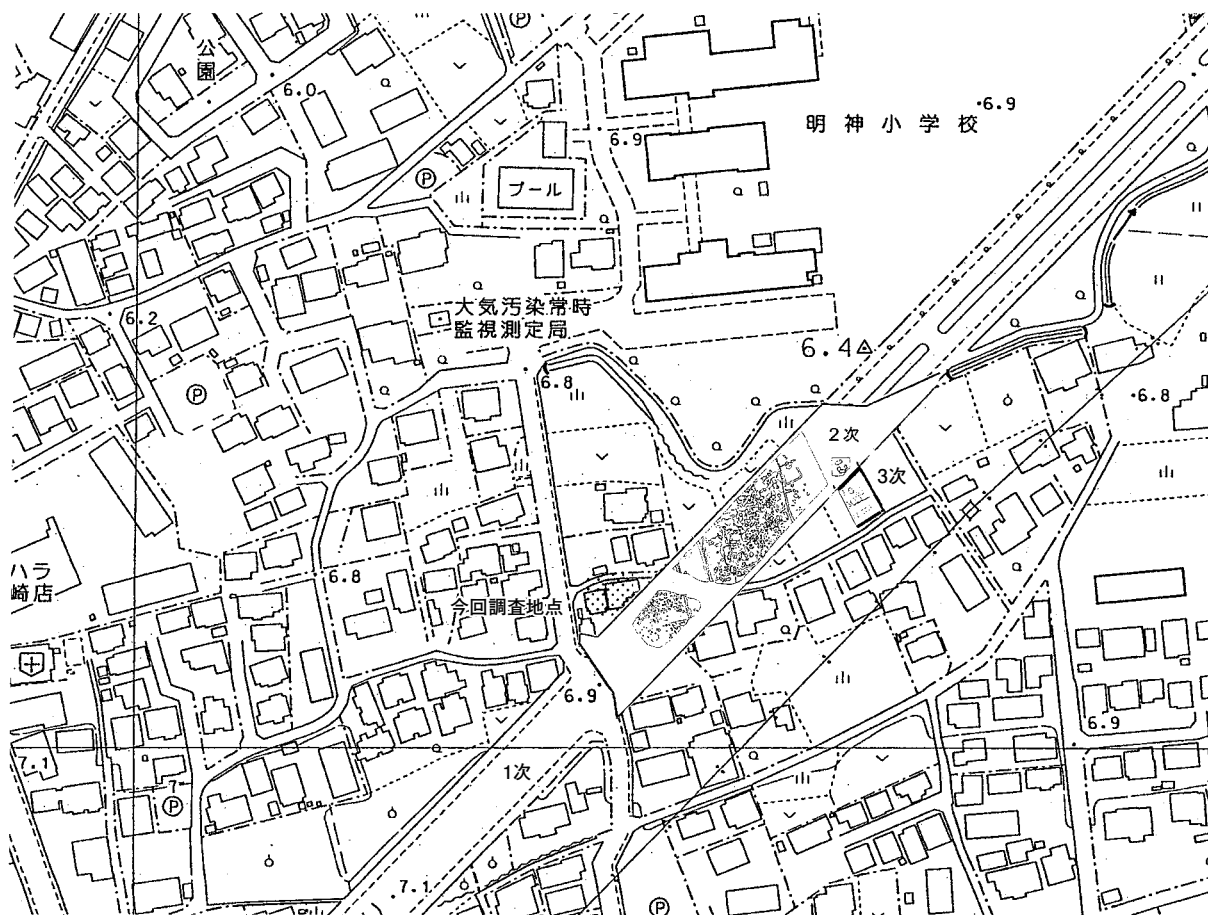
貝層（2号遺構）は調査区の南西隅付近で検出された。土層断面によると青灰色砂層を人為的に掘り込み、そこに貝を投棄したように見える。

出土遺物 遺物は包含層（1号遺構とした。）出土のものと各土坑および貝層出土のものに大別される。各土坑および貝層出土の遺物は点数的には少ないが、いずれも中世のなかでおさまる。一方、包含層出土遺物は縄文土器から近世の磁器に至るまで時期的にはかなり幅がある。なお、量的にも今回の調査で出土した遺物の総点数のうちのほとんどを包含層出土遺物が占めている。

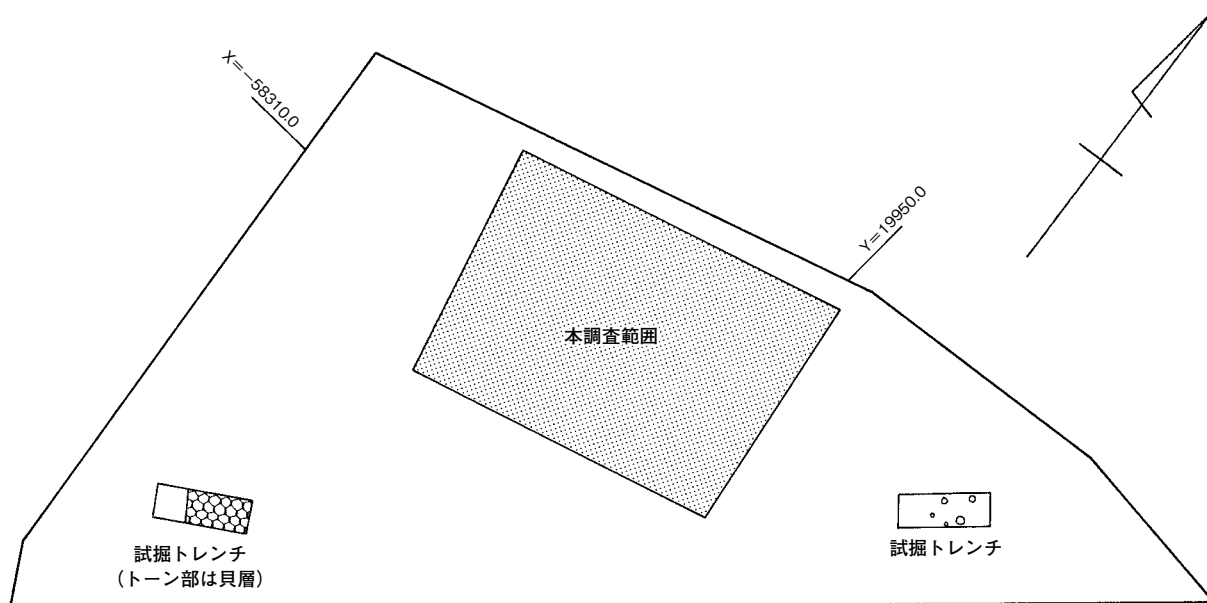
棗塚遺跡の北東方面に広がる山新遺跡において、大量の縄文土器が出土しており、今回出土した縄文土器も山新遺跡から流出したものであるかもしれない。包含層から近世にいたる時期までの遺物が出土することは、洪水等の影響を受け易い環境が近世まで続いていたことを示唆しているようである。

出土遺物のうち縄文土器等は全体に磨耗がひどく図示するに足るものはなかった。また、紙幅の都合もあり、特に特徴的な遺物に限定して図示した。1～5は中世の陶器類である。1～4はいずれも瀬戸・美濃系陶器である。1は挿鉢である。内面に突帯がめぐり、わずかにすり目が認められる。古瀬戸後期様式

棗塚遺跡



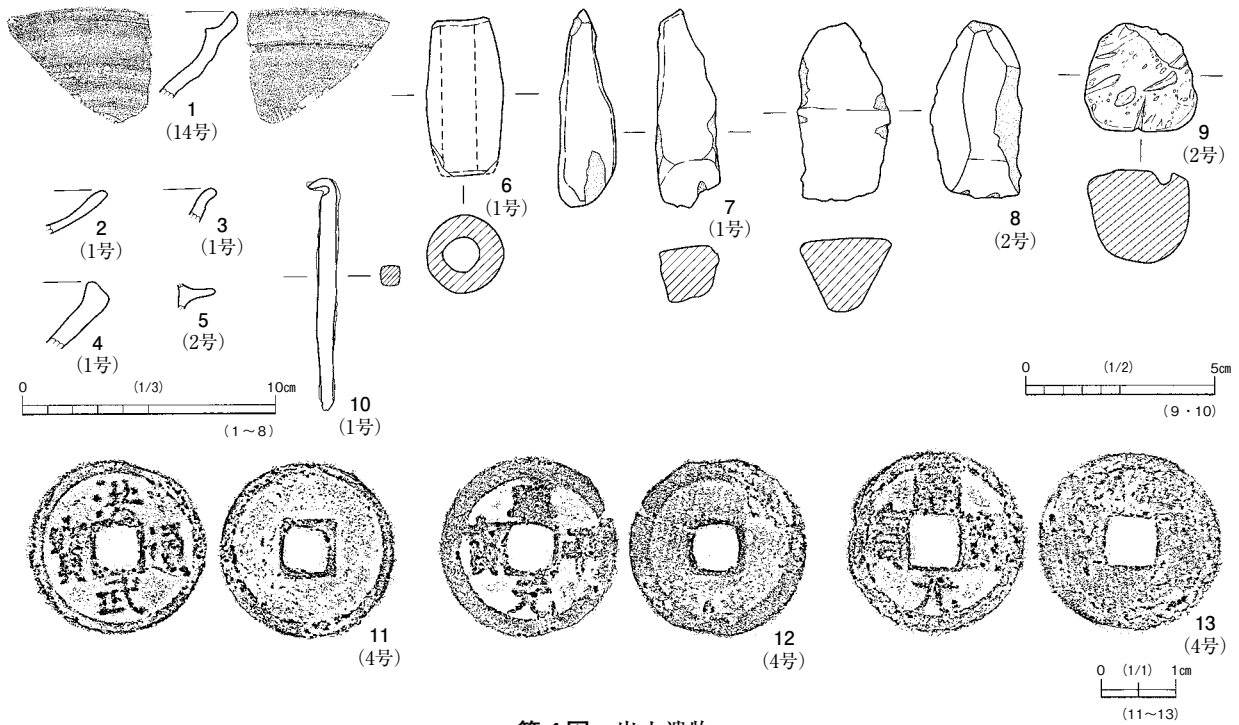
(1/2,500)



(1/200)

第2図 棗塚遺跡調査位置図

棗塚遺跡



第4図 出土遺物

甕の破片を砥石として転用したものが散見される。9は軽石製の浮子である。10は釘。11～13は人骨とともに出土した銭である。11は洪武通宝（明 初鑄1368年）、12は□平元宝、13は□□元宝と判読される。このうち12については治平元宝（北宋 初鑄1064年）、あるいは端平元宝（南宋 初鑄1234年）が考えられるが、それ以上の絞り込みは困難である。13についてはさらに難しい。

土壙墓出土の人骨については、渡辺新氏の協力により、部位の同定を行なった。13点の資料のうち5点について、同定が可能であった。同定された部位および所見は以下の通り。①前頭骨眉間部小片、おそらく幼児。②前頭骨眼窩上縁部小片、おそらく幼児。③下顎骨右体部乳犬骨部－第2大臼歯～下顎角部、歯の形成状態から年齢は5～6歳（より詳細な所見をいただいたが、ここでは概要のみ記載する）。④大腿骨左、遠位端を欠く。骨端は未融合で未融合骨端骨は保存なし。⑤大腿骨右、僅かに近位端の保存があり未融合面を認める。④と同一個体とするに齟齬はない。

棗塚遺跡中世遺物集計表 調査面積63㎡

種別	器種	分類	点数	砥石転用	種別	器種	分類	点数	砥石転用
常滑産陶器		小計	8	3	土師質土器		小計	19	
	甕	不明	6	2		内耳鍋	不明	1	
	片口鉢Ⅱ類	不明	2	1		播鉢	計	11	
瀬戸・美濃	天目茶碗	小計	13	1			後Ⅳ（新）	3	
		計	2				大窯1	1	
		古瀬戸後期	1				不明	7	
	播鉢	後Ⅳ	1			カワラケ（小皿）	計	6	
		計	10	1			16世紀	1	
後Ⅳ（新）		2	1	不明			5		
大窯2		1		土錘		不明	1		
大窯3		1				東海系土器	羽釜	15世紀後葉か	1
不明		6		中世遺物総計		41点	1㎡当たり0.65点		4
縁釉小皿	後Ⅳ	1							

棗塚遺跡出土の動物遺存体

貝層の概要と分析方法

棗塚遺跡からは、調査区南西隅から貝層が検出された。貝層は、西側に向かって緩やかに傾斜する砂堆の縁部分に堆積する。貝の保存状態は極めて悪く、ほとんどが破損する資料であった。調査担当者によれば、貝層の形成時期は中世後期（15世紀）とされる。

貝の分布範囲には30×30cmのコラムサンプルが2ヶ所（A・B地点）設定され、厚さ5cmで採取が行われた。また、これ以外の貝層は、2号遺構として全量が一括採取されている。持ち帰られた貝層サンプルは、10mm・4mm・1mmの各メッシュ寸法の試験用フルイを用いて、水洗選別を実施した。分類作業により抽出された資料には、貝類、両生類・爬虫類・哺乳類・魚類骨、種子があるが、このうち種子についての分析は未了である。獣骨・魚骨については、出土量ごく僅かであったことから、内容物集計表（表2）の備考欄中に記載を行なった。また、発掘調査時に大型哺乳類骨が取り上げられていたことから、こちらは上奈穂美氏に同定を依頼した。

同定は、現生ならびに貝塚出土標本との比較により行なった。貝類の集計は、腹足類（巻貝）では軸部を完存するもの、二枚貝綱では殻頂部の残存するものを対象とした。二枚貝類は左右殻の出土数量の多い方をもって出土個体数（最小個体数）とした。ハマグリ、シオフキ、アサリの3種は殻長計測を行なったが、計測個体が少ないことから、ハマグリについては久保（1988）の方法に従って楕面長の計測を行ない、西野（2004）によって示された計算式（殻長＝楕面長×2.99+1.4）をもとに殻長の復元推定を行なった。

分析結果

分析の結果、腹足綱（巻貝）6種・二枚貝綱8種の計14種の貝類が同定されたほか、脊椎動物骨として、両生綱1種、爬虫綱1種、哺乳綱3種、硬骨魚綱1種が同定された（表1）。

(1) 両生類

コラムサンプルA-2カットと2号遺構一括採取サンプルから、カエル類の上腕骨、橈・尺骨、中手ないし中足骨が検出された。いずれも小型で、重複部位が見られないことから、同一個体に由来する可能性が高い。

(2) 爬虫類

コラムサンプルA-3カットから、ヘビ類の椎骨1点が検出されたのみである。

(3) 哺乳類

2号遺構一括採取サンプルから、ネズミ類の肩甲骨、中足骨、上腕骨？、尾椎？が検出された。ネズミ類は頭部や臼歯の形状に種の特徴が認められるが、今回は四肢骨のみの出土であった。手持ちの標本も少なく、四肢骨での詳細な検討が可能かは不明である。重複する部位が認められず、出土量もわずかであることから、これらは同一個体に由来する可能性が高い。小型のネズミであることから、自然死か、あるいは捕獲・遺棄された個体と考えられる。

1号遺構からは、発掘調査時にウマの左側下顎第2後臼歯が採集された。歯冠長27.6mm、幅18.2mmを測る。歯根部を破損するが、歯冠高は60mm前後を測るものと思われ、6歳程度の個体と考えられる。このほかに、試掘トレンチからはウシ？の右側脛骨遠位部が出土している。

(4) 魚類

コラムサンプルAから2点の腹椎骨が検出された。このうちカット3から出土したものは、アジ科の腹椎骨に同定された。

(5) 貝類

個体数ではイボキサゴが半数を占めるものの、全体としてシオフキ・アサリ・ハマグリ の 3 種を中心に形成された貝層であることが考えられた。これら 4 種以外に同定された貝類種はいずれもごく少量で、混獲と捉えられる程度のものである。内湾砂泥底の干潟に生息する種で構成されるが、唯一サザエのみが岩礁域からの搬入種となっている。蓋のみが検出されたが、現存最大径15.6mmを測る小型の個体である。市内では古墳時代中期段階にはサザエの殻と蓋が同時に出土することから、この頃までには富津岬以南や外房の岩礁域から食材として搬入するルートが存在していたことが明らかになっている（鶴岡2005A）。

貝類の計測値

藁塚遺跡からは、最小個体数397のハマグリが検出されたが、ほとんどが破損していたことから、前述のとおり、殻長の復元推定を試みている。この結果、殻長25～45mm階級幅にピークを持ち、これ以外の範囲については、個体数がごく少ないということが明らかとなった。推定殻長の平均値は36.27mm、標準偏差は±7.06mmである。また、シオフキとアサリの殻長についても計測を行なったが、計測試料数はいずれも少なく、シオフキは5点で平均値36.5mm、標準偏差±3.54mm、アサリは6点で平均値34.83mm、標準偏差±4.25mmであった。各貝種ともに計測値の分布が狭い範囲に限られることから、何らかの選択性が働いていた可能性も考えられる。

貝層と動物遺存体についての若干の検討

藁塚遺跡から検出された貝層は、ほぼハマグリ・シオフキ・アサリ・イボキサゴの4種によって構成されていた。貝類以外の動物遺存体はごく少量が検出されたのみで、カエル・ネズミ・ヘビは斃死個体の可能性が高い。大型哺乳類にはウシ?とウマがあり、ウマについては井戸や溝跡から出土する事例がしばしば認められ、祭祀行為との関連性が指摘される場合が多い。ただし、今回はいずれも遺構外からの出土であり、周辺の状態も明らかでない現状では、貝類を含めたこれらの遺存体については、食料残滓や塵芥としての性格しか見いだすことができない。一方、わずかではあるが魚類骨が抽出された点は、今回の整理作業の大きな成果のひとつといえる。調査区からは漁撈具と思われる管状土錘と軽石も出土していることから、調査区周辺に暮らした人々の一部がこれらの漁撈活動に直接携わっていた可能性は高く、半農半漁的な生業形態を想定することが可能かもしれない。ただし、周辺調査区の整理作業が行なわれていないため、遺跡や遺構の性格、遺物の内容や出土状況などを含めて、慎重に検討を加える必要がある。

近年市内では、縄文期以降に形成された貝層および出土動物遺存体の分析事例が増加し、徐々にデータが蓄積されつつあるが、中世に関しては調査例自体が少なく、今回の藁塚遺跡や分目要害遺跡地下式坑の貝ブロックなどが検出されているにすぎない。また、分析事例については、海上地区遺跡群の中世前期貝層の報告がなされたのみである（上2005・鶴岡2005B）。今回の藁塚遺跡の貝層形成時期は中世後期と考えられていることから、市内の動物利用変遷の空白を埋める資料を提示できたことは貴重な成果といえる。

参考文献

- 上奈穂美 2005 「海上遺跡群出土のウマ (*Equus caballus*)」『市原市海上地区遺跡群』 198-200 (財)市原市文化財センター
- 久保和士 1988 「ハマグリ の 殻 長 推 定 に 関 す る 一 試 論」『古代文化』 40-5 27-35 (財)古代学協会
- 鶴岡英一 2005A 「加茂遺跡A・B地点出土の貝類遺体について」『市原市加茂遺跡A・B地点』467-470 (財)市原市文化財センター
- 鶴岡英一 2005B 「海上地区遺跡群(西野遺跡群B・D地点)出土貝サンプルの分析結果について」『市原市海上地区遺跡群』 192-197 (財)市原市文化財センター
- 西野雅人 2004 「3 動植物遺体」『市原市市原条里制遺跡(蛇崎八石地区)・仲山遺跡』 8-13 (財)市原市文化財センター

棗塚遺跡

表1 棗塚遺跡出土動物遺存体種名一覧

綱	Class	目	Order	科	Family	種	Species
両生綱	Amphibia	カエル目	Anura			ナミガエル亜目種不明	Neobatrachia fam. Indet.
爬虫綱	Reptilia	有鱗目	Squamata			ナミヘビ上科種不明	Colubroidea fam. Indet.
哺乳綱	Mammalia	ネズミ目	Rodentia	ネズミ科	Muridae	ネズミ科種不明	Muridae gen. et sp. Indet.
		ウマ目	Perissodactyla	ウマ科	Equidae	ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus
		ウシ目	Artiodactyla	ウシ科	Bovidae	ウシ?	<i>Bos taurus</i> Linnaeus
硬骨魚綱	Osteichthyes	スズキ目	Perciformes	アジ科	Carangidae	アジ科種不明	Carangidae gen. et sp. Indet.
腹足綱	Gastropoda	原始腹足目	Archaeogastropoda	ニシキウズガイ科	Trochidae	イボキサゴ	<i>Umbonium (Suebium) moniliferum</i> (Lamarck)
		中腹足目	Mesogastropoda	サザエ科	Turbinidae	サザエ	<i>Turbo (Batillus) cornutus</i> (Lightfoot)
		新腹足目	Neogastropoda	ウミナナ科	Batillariidae	ウミナナ科種不明	Batillariidae gen. et sp. Indet.
				タマガイ科	Naticidae	ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i> (Röding)
二枚貝綱	Bivalvia	フネガイ目	Arcoida	フネガイ科	Arcidae	サルボウガイ	<i>Scapharca kagoshimensis</i> (Tokunaga)
		ウグイスガイ目	Pteroida	イタボガキ科	Ostreidae	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg)
		マルスタレガイ目	Veneroida	バカガイ科	Mactridae	シオフキガイ	<i>Mactra quadrangularis</i> Deshayes
				マテガイ科	Solenidae	マテガイ	<i>Solen strictus</i> Gould
				マルスタレガイ科	Veneridae	カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i> (Reeve)
						アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i> (A.Adams et Reeve)
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Röding)						
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin)						

表2 棗塚遺跡貝層サンプル内容物集計

コラム・遺構	カット	時期	総乾重量 (g)	フルイ水洗後残留物重量 (g)				土壌重量 (g)	混土率 (%)	集計対象貝 (g)	破砕率 (%)	獣骨 (g)			魚骨 (g)		礫 (N)		軽石 (g)			
				10mm	4mm	1mm	計					10mm	4mm	1mm	計	10mm	計	10mm	4mm	計		
A-1	0~5cm	中世後期	27,800	324.0	699.0	1,410.0	2,433.0	25,367.0	91.2%	165.4	93.2%						8	8				
A-2	5~10cm	中世後期	18,500	181.6	395.0	1,036.0	1,612.6	16,887.4	91.3%	92.7	94.3%	0.1	0.1	0.1	0.1	3	3					
A-3	10~15cm	中世後期	22,500	157.0	310.0	1,427.0	1,894.0	20,606.0	91.6%	65.5	96.5%	0.1	0.1	+	+							
B-1	0~5cm	中世後期	24,000	62.1	140.0	1,312.0	1,514.1	22,485.9	93.7%	25.0	98.3%					5	5	3.4	0.2	3.6		
2号	一括採取	中世後期	149,700	2,646.8	3,028.4	7,883.5	13,558.7	136,141.3	90.9%	1,422.2	89.5%	0.8	0.4	0.2	1.4	0.5	0.5	33	33			
遺跡	合計		242,500	3,371.5	4,572.4	13,068.5	21,012.4	221,487.6	91.3%	1,770.8	91.6%	0.8	0.4	0.4	1.6	0.6	0.6	61	61	3.4	0.2	3.6

炭化米 (N)	炭化物 (g)			植物遺体 (N)		土器片 (N/g)	備考
	10mm	4mm	1mm	1mm	計		
		+	0.2	0.2		9/13.4	
2	1.5	2.9	1.2	5.6	1	3/60.4	カエル類上腕骨L・R・椎骨*3 種不明魚類腹椎骨 ヘビ類椎骨 アジ科腹椎
11	0.2	0.5	1	1.7		1/4.6	
30	1.4	3.5	8.5	13.4		33/61.6	ネズミ類肩甲骨R・第3中足骨L・第5中足骨R・大腿骨L2・尾椎? カエル類機尺骨R・中手中足骨L/R 真珠?
43	3.1	7.2	11.4	21.7	1	55/145.8	

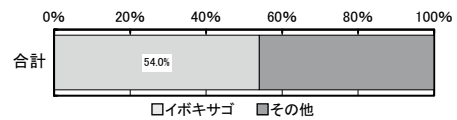
表3 軟体動物出土量集計

位置 コラム	A-1	A-2	A-3	B-1	2号	合計
	0~5cm	5~10cm	10~15cm	0~5cm	一括	
貝層の時期	中世後期					
イボキサゴ	237	163	116	1	689	1,206
サザエ (蓋)					1	1
ウミナナ科					7	7
ツメタガイ	1				6	7
アカニシ					2	2
アラムシロガイ					2	2
サルボウガイ					1	1
L						
R						
マガキ		1			2	3
L					3	4
R	1					
シオフキガイ	23	35	10	1	303	372
L	16	30	10		263	319
R					1	1
マテガイ					1	1
L						
R						
カガミガイ					1	1
L						
R						
アサリ	14	11	19	1	185	230
L	22	9	6	1	181	219
R						
ハマグリ	51	38	28	10	270	397
L	39	38	28	18	210	333
R						
オキシジミ					2	2
L						
R						

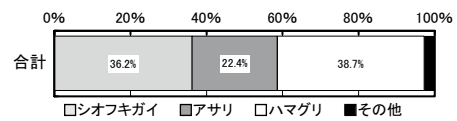
表4 ハマグリ計測値集計

楕面長 (mm)	n	%	推定殻長 (mm)	n	%
-6.0	0	0.0	-20.0	0	0.0
-7.0	1	0.9	-25.0	3	2.7
-8.0	2	1.8	-30.0	19	17.1
-9.0	8	7.2	-35.0	31	27.9
-10.0	21	18.9	-40.0	28	25.2
-11.0	16	14.4	-45.0	21	18.9
-12.0	17	15.3	-50.0	5	4.5
-13.0	18	16.2	-55.0	1	0.9
-14.0	8	7.2	-60.0	2	1.8
-15.0	12	10.8	-65.0	1	0.9
-16.0	4	3.6	-70.0	0	0.0
-17.0	1	0.9			
-18.0	0	0.0			
-19.0	2	1.8			
-20.0	1	0.9			
試料数	111		試料数	111	
平均	11.66		平均	36.27	
標準偏差	2.36		標準偏差	7.06	

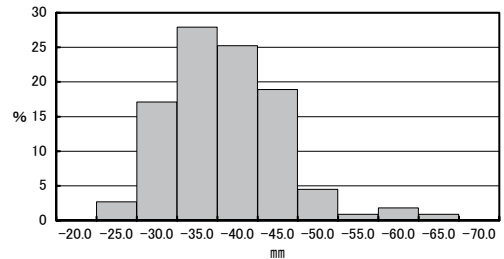
貝層全体の組成



イボキサゴ以外の組成



グラフ1 貝類組成



グラフ2 ハマグリ推定殻長分布

3 海士遺跡群三入道地区

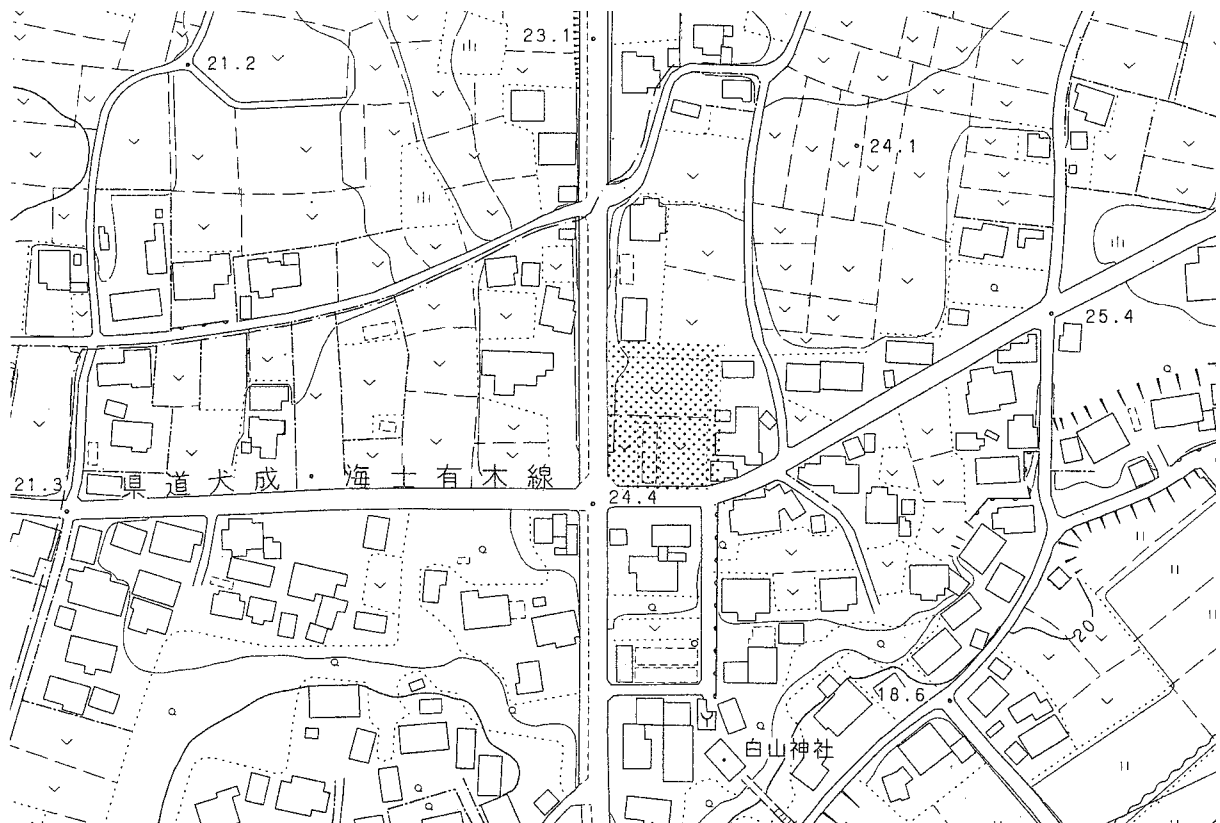
調査概要 遺跡は養老川中流右岸の標高約24mの台地上に存在する。北方約300mの箇所には奈良・平安時代を中心とする遺跡である池ノ谷遺跡がある。この遺跡からは「岡木家」と書かれた墨書土器が出土しており、その「家」が何を意味するか注目されたところであるが、その後の調査例の蓄積もなく、付近一帯の歴史像は必ずしも明らかではない。なお、調査対象地は蟻木城跡としても括られている部分であるが、中世に係る遺構・遺物の存在は明らかではなかったため、大括りの海士遺跡群のうちの一地区として報告する。

調査は対象地に15本のトレンチを設定して行なった。トレンチ調査であるため、確認された遺構の形態については、やや不安定な部分があることは否めない。一部のトレンチについてはサブトレンチを設定し遺構の性格・時期等の把握につとめた。

確認した遺構 調査の結果、弥生時代後期住居跡8軒・土坑1基、平安時代住居跡3軒・土坑1基・掘立柱建物跡1棟などが検出された。なお、確認調査の結果をうけて、調査対象地の西側約三分の一が本調査対象とされ、その結果、確認調査時点で弥生時代の溝と判断していたものが、方墳、円墳の周溝の一部であったことが判明した。ここで示した遺構分布図には、その成果を一部加味している。

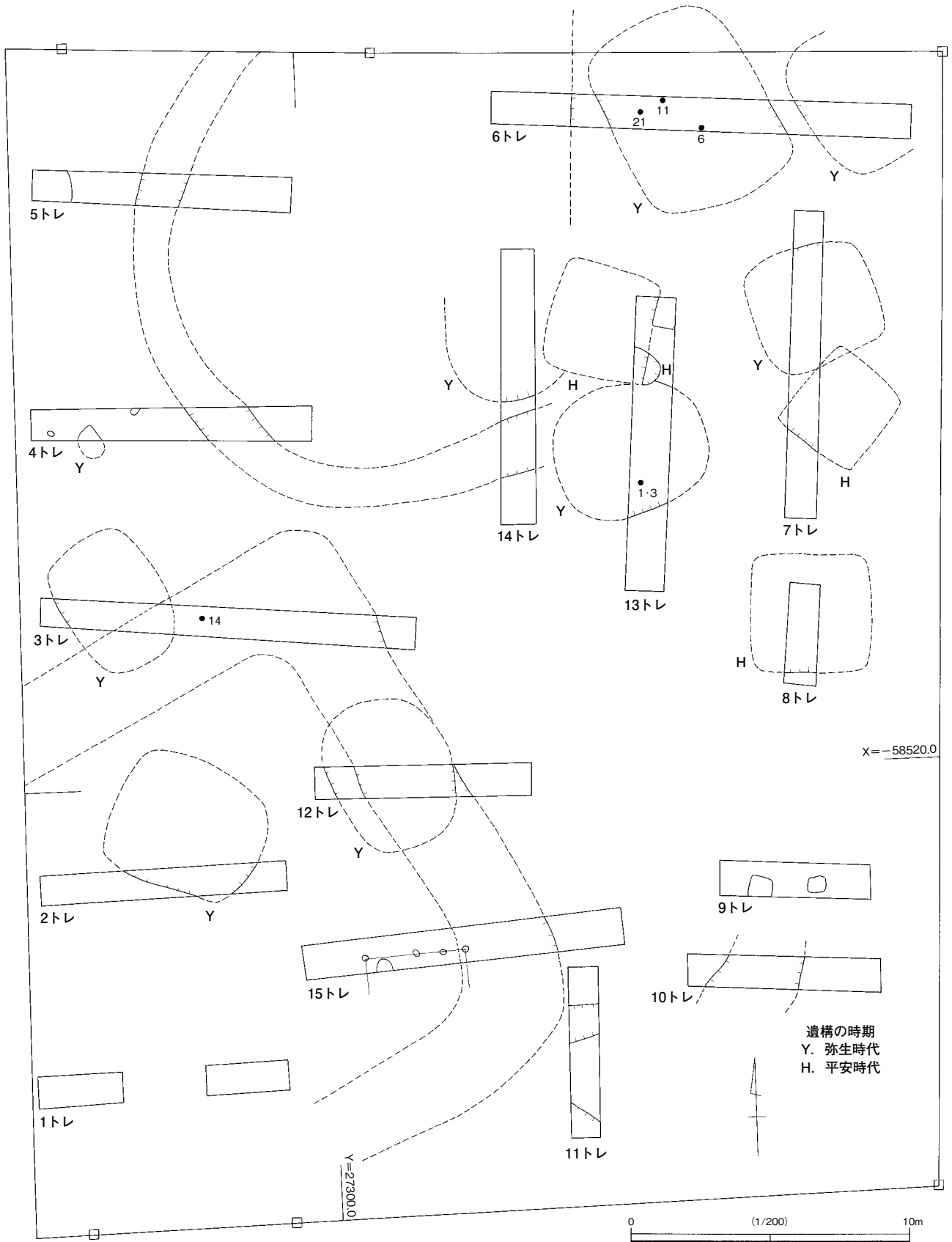
ほぼ全トレンチで何らかの遺構が捕捉されており、比較的密度の高い遺構分布を示しているが、13トレンチあたりで遺構の重複が著しい以外は、あまり遺構の重複はないようである。

弥生時代の集落期、古墳群の展開期、平安時代の集落期の大きくわけて3段階の土地利用の変遷をみてとることはできよう。



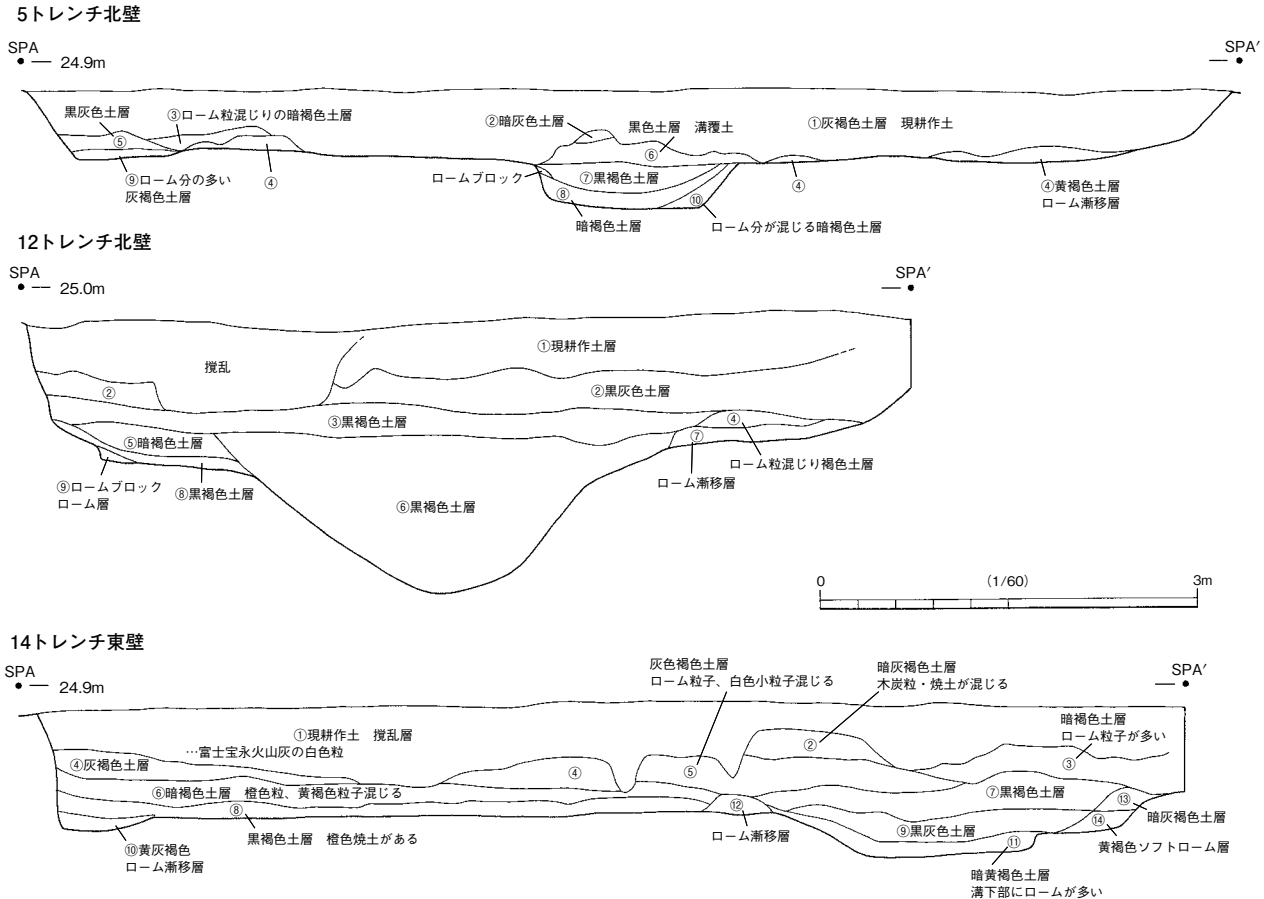
第5図 海士遺跡群三入道地区周辺地形図 (1/2,500)

海士遺跡群三入道地区



第6図 海士遺跡群三入道地区全体図

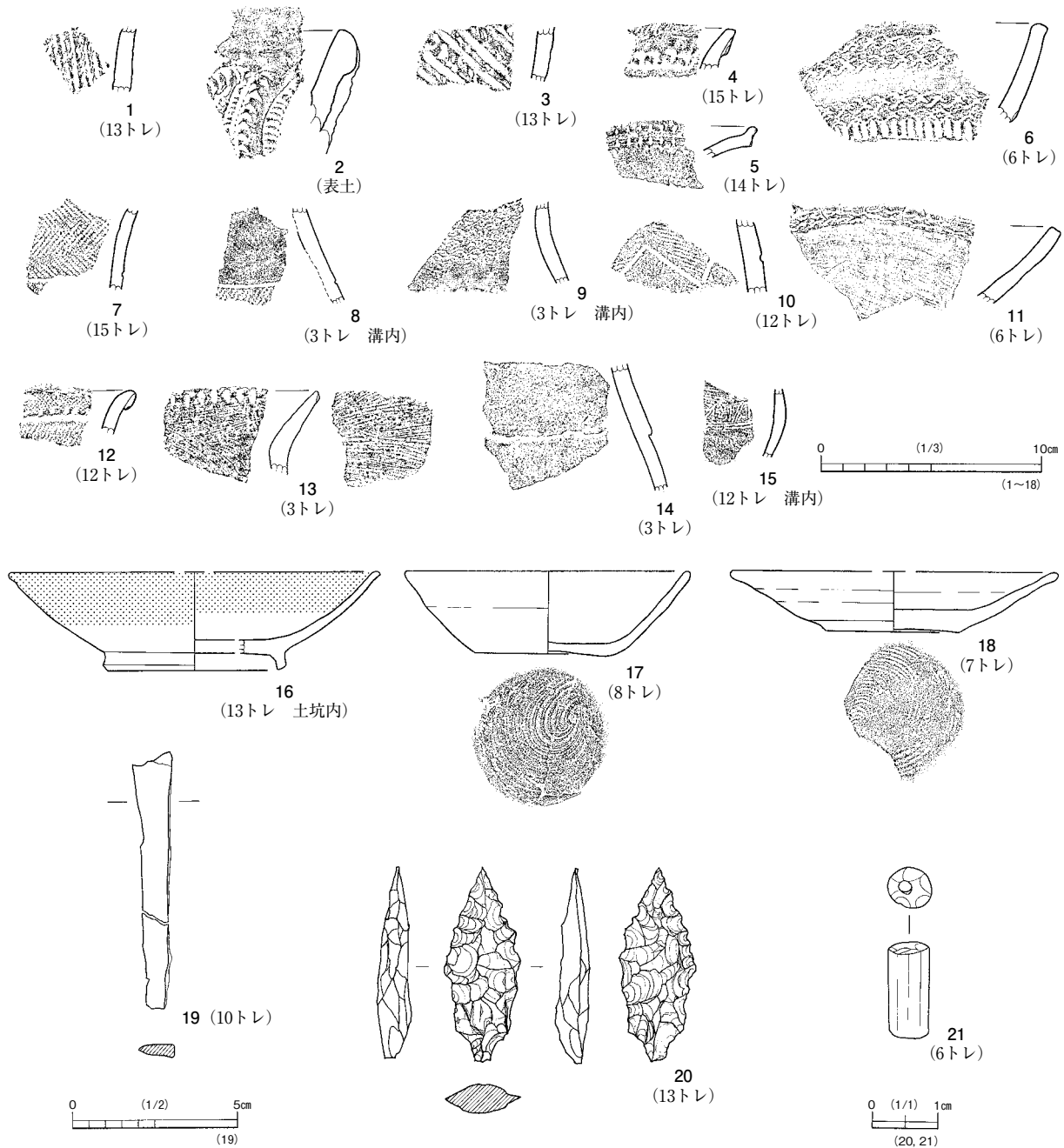
海土遺跡群三入道地区



第7図 主要トレンチ土層断面

出土遺物 確認調査という調査上の制約もあって、良好な遺物の出土は少なかった。ここに示したものは、比較的遺存状態の良い破片資料および実測可能個体である。1～3は縄文土器。1は早期の撚り糸文系、2は中期の阿玉台式、3は後期の加曾利B式の粗製深鉢であろう。4～14は弥生後期の土器である。4、5は壺の口縁で、4は口唇部にわずかに縄文（単節LR）が施文されている。折り返し口縁部は下端のみに工具不明の円形の刺突が巡る。5は大きく外反する口縁外面に櫛状工具による刺突が施されている。6はやや大型の複合口縁の鉢あるいは壺の口縁部で4条1単位のS状結節文が2単位巡らされる。口縁下端には刻みが巡るが、布を使用したと見られる。11は直線的に開く鉢の口縁部で口唇のみに2条のS状結節文が施される。7～10は壺の頸部もしくは胴部の施文部で、7は少なくとも3段の羽状縄文の下端に水平な沈線区画がある。8は水平沈線の下に単節LRの施文がある。9はS状結節文のみによる施文である。10は連続山形文の巡るものである。12～14は甕である。12はやや毛色を異にし、折り返し口縁部から胴部にかけて細かい縄文が施される。口縁部下端は弱い刻みが巡る。13はやや外反する口縁の外縁に刻みが巡る。内外面ともに水平方向のハケメが認められる。14は輪積み痕を残す甕の頸部。15は小型の壺であろうか、下端に細い2本の沈線があり、この沈線と接するように上位に振幅は大きい波長が短い波状文がわずかに認められる。これら破片資料から読み取れることは少ないが、沈線区画のものが多く、S状結節文を区画文として使用しているものがないことなどを、総合的な特徴としてあげることができる。16～18は平安時代の陶器・土器である。16は灰釉陶器で、口径16.4cm、高台径7.7cm、器高4.4cmである。口縁はわずかに外反し、器壁は全体に薄い。内外面とも体部上半に施釉されている。刷毛塗りのよ

うに見える。内面底部近くには重ね焼きの痕跡がある。高台は三日月形といってよいであろう。高台の一部は焼成段階でつぶれている。17はロクロ土師器で、口径12.6cm、底径6.0cm、器高4.0cmである。底部は回転糸切り無調整で、体部下端の調整もない。色調は暗褐色ないし黒褐色で全体にまだら模様といった感がある。胎土では金雲母の微粒子がやや目立つ。18はロクロ土師器の皿である。口径10.0cm、底径6.0cm、器高2.7cmである。底部は回転糸切りののち部分的にヘラで調整したような擦痕がある。体部下端はヘラ削りしている。全体に鈍い橙色を呈し、砂っぽい触感がある。19は鉄製の刀子。20は縄文時代の有茎石鏃で、全長29.2mm、幅11.7mm、厚さ4.9mm、重量は1.5gでチャート製である。21は濃緑色の滑石製の管玉である。長さ14mm、幅5mmで、穿孔部の径は上方で1mm、下方で3mmである。上面の外縁に5箇所のうち欠いた痕跡があるが、近藤敏氏より再生加工の痕跡ではないかとの教示を受けた。



第8図 出土遺物

4 稲荷台遺跡L地点

調査概要 今回の調査地点は稲荷台遺跡の中心と目されるE地点の北方約300mの地点にあたる。標高約26mの台地の北縁部である。この台地を北に下った地点は「在長面」という小字を残し、「在庁免」の転化したもので、在庁官人の給免田を意味すると考えられており国府との強い関係が予想されているところである。今回の調査は、国府関連遺跡としての性格が強く見られる稲荷台遺跡の北方への影響範囲の把握という側面も持つものであった。

調査は対象範囲にトレンチを15本設定して行なった。東西方向のトレンチを主とし、一部南北方向のトレンチを併用した。また、遺構の形状や時期の詳細を把握するために、一部を拡張したり、サブトレンチを設定したものもある。

稲荷神社の境内地であったためか耕作の影響が少なく、一部のトレンチでは富士宝永の火山灰が検出されている。

確認した遺構 調査の結果、弥生時代後期の住居跡4軒・古墳時代前期の住居跡4軒・奈良時代の住居跡2軒・平安時代の住居跡15軒・掘立柱建物跡6棟・土壙墓1基・土坑7基・溝状遺構6条を確認した。ほとんどのトレンチで何らかの遺構を捕捉しており、全面的に遺構が広がっていることを想起させる。全体的な傾向としては、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が展開する時期と、奈良・平安時代の遺構が展開する時期の大きく分けて二つの時期に遺跡のピークがある。

弥生時代の住居跡は概して出土遺物が少なく、時期の判定はやや不安定である。覆土および平面形態から判断したものもある。この点については、奈良時代の住居跡についても同様である。

掘立柱建物跡については、トレンチ調査という制約上その捕捉は困難であった。ピットの形状・規模・並び方・柱痕跡の有無等をもとに判断したが、今後に委ねられる部分も多い。

土坑のひとつからは、短刀が出土している。土壙墓と考えられるが他に副葬品の出土はなかった。

直線的な溝状遺構については、富士宝永火山灰が埋没過程で堆積したことが認められるところから、近世の地境の溝である可能性がある。

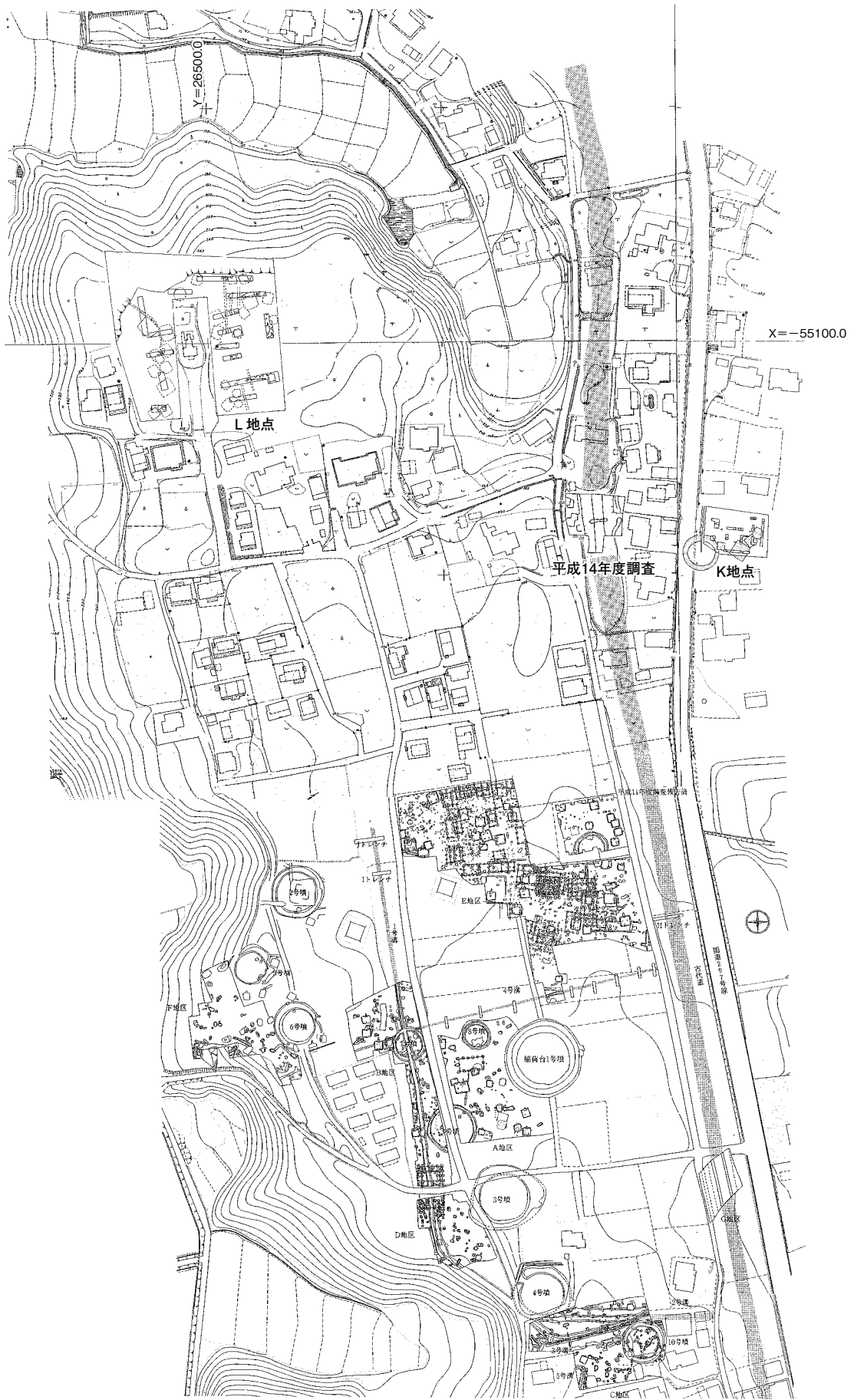
出土遺物 1～7は縄文土器である。縄文時代の遺構は今回は確認されていないが、近在する可能性がある。1は三戸式、2・7は早期の条痕文系、3は外面に横走る2本の低い隆線がある。4は縦方向の波状文がある。5はわずかに縦位の沈線区画と縄文が見られる。中期加曾利E式であろう。

8～24は弥生土器の破片資料である。8～11は壺の口縁で折り返し部の下端の刻みには布が多用されているようである。8は口縁内面に結節文が巡っている。また、わずかに口唇部にも弱い施文がある。12～18は壺の胴部で、総体的に水平沈線による文様区画が多いようである。13は絡条体による施文の下端に結節文、さらにその下位に水平沈線が巡っている。14・16は網状撚り糸文が用いられている。19・20は鉢の口縁部。21～24は甕の口縁部ないしは頸部である。23は内面に折り返され、その下端には刻みが加えられる。

25～28は古墳時代前期の土器である。25・28は埴であるが、25の底部には、器壁を貫通する長さ約3.5cm、幅約1.5mmのスリットがつけられている。26は内外面ともミガキが加えられた鉢、27は外面にハケメを残す甕の底部で木葉痕をよく残している。

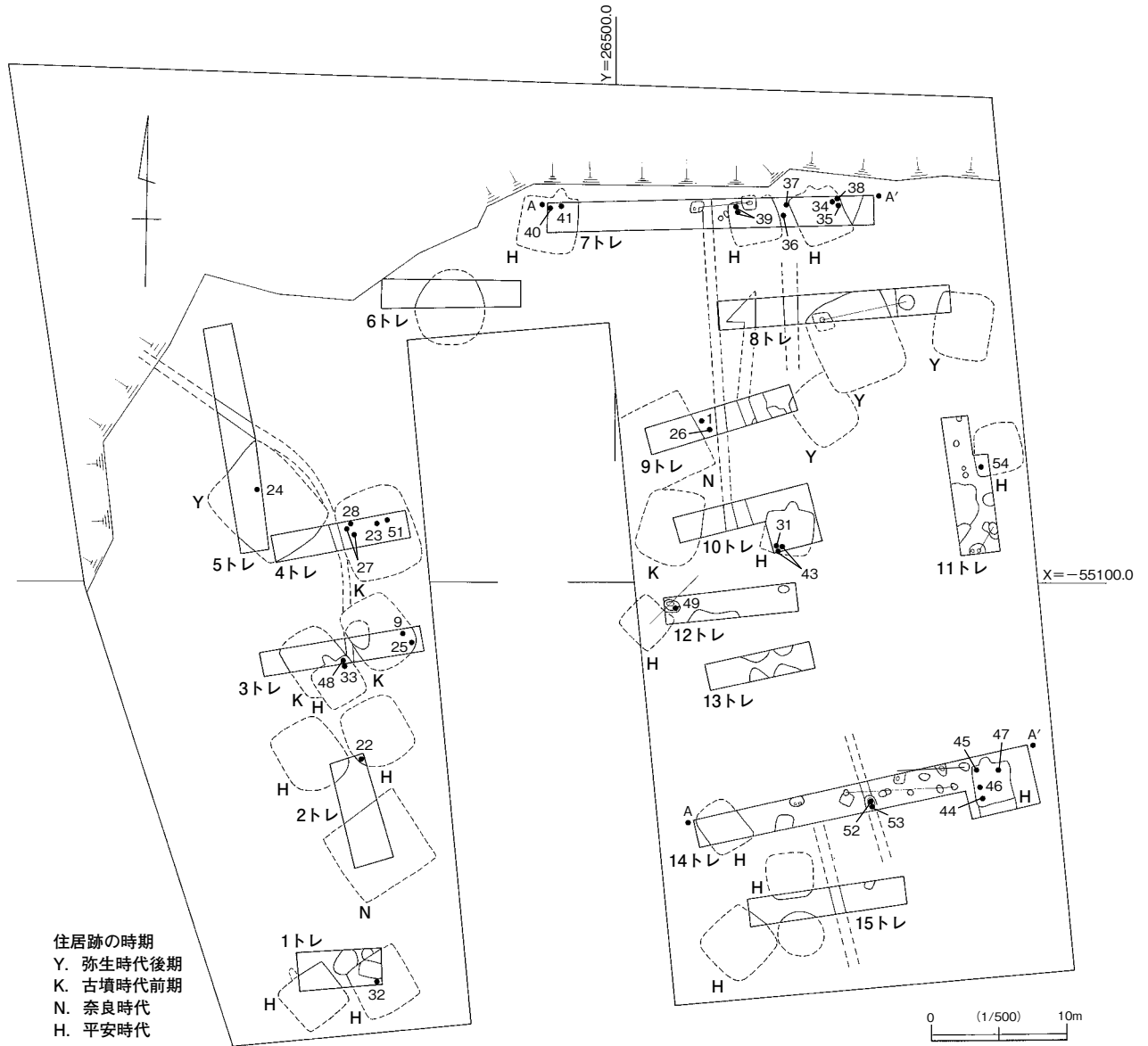
29は須恵器の甕の胴部で内面のあて具痕がナデられずに残っているところから、古墳時代後期の可能性があり、ここに収めた。

稻荷台遺跡L地点

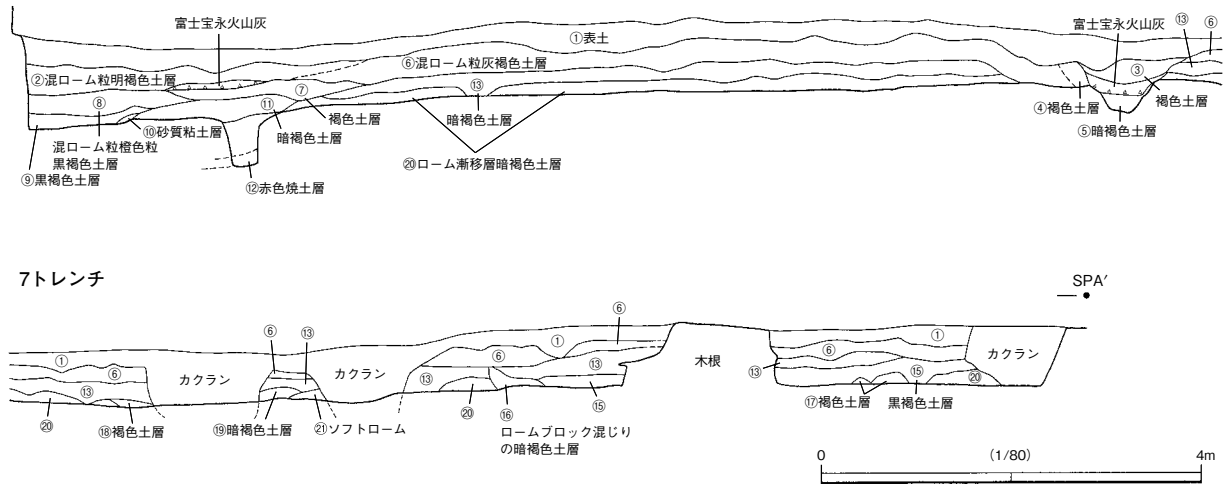


第9図 稲荷台遺跡全体図

稲荷台遺跡L地点

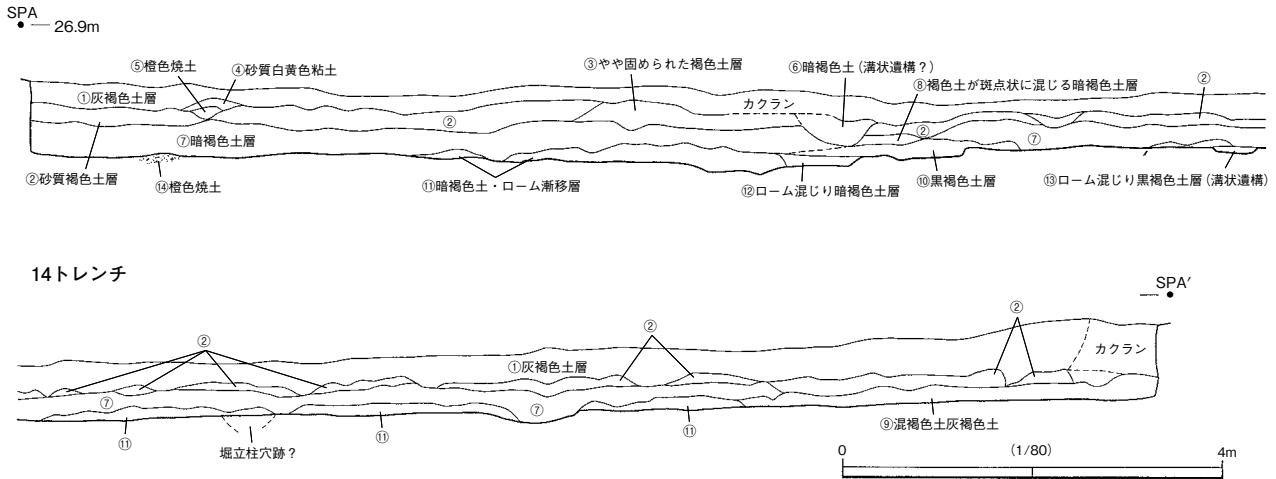


SPA
 ●— 26.3m



第10図 稲荷台遺跡L地点全体図・土層断面図(1)

稻荷台遺跡L地点



第11図 土層断面図(2)

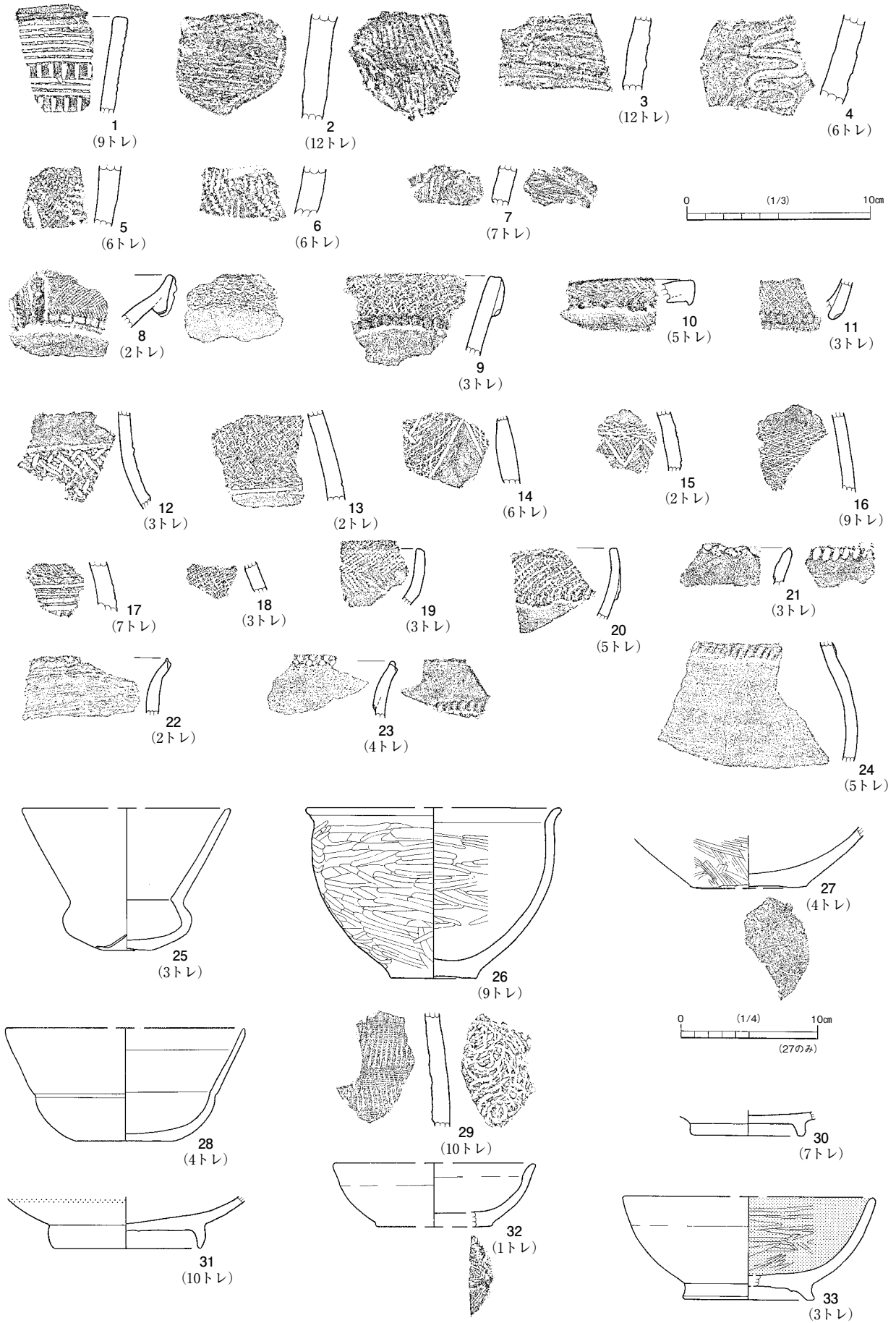
30～47は平安時代の陶器・土器である。30は緑釉陶器の底部で、全面的に施釉されている。釉の発色は甘い。31は灰釉陶器の底部で外面にわずかに施釉が認められる。高台は三日月高台である。内面は中央に行くにしたがって下がっている。硯として転用されたのか、内面中央付近は平滑である。また、底部外面には暗赤褐色の付着物がある。一見したところベンガラのように見える。32以降47まではロクロ土師器を主とする日常雑器類である。トレンチ番号順に配列してある。32はやや小振りの坏で体部が曲線的でやや異質な感がある。33は内黒の碗である。34は底部内面に「生」と墨書されたものである。体部下端は手持ちヘラ削りされ、底部は弦方向にヘラ削りされている。35はややロクロ目がきつい。36は内黒で底部外面は弧方向にヘラ削りされている。37は縦方向に叩き目を持つ甕の破片で、暗褐色を呈する。千葉県域産と考えられる。ここに提示した以外に須恵器の甕の破片は散見されているが、本報告では割愛した。38は土師器の甕の口縁部で端部が外方につまみ出されている。外面は縦方向に削られている。39～44は一般的な形態の坏で、45・46は器高がやや低く皿に近い形態である。47は内黒土器の底部内面に花卉が表現されたものである。「暗文花文土器」と『稻荷台遺跡』（浅利他2003）で報告されているものと同種のものであろう。いまのところ同種の遺物は他所での出土例を聞かない。土器の需給関係を考える上で貴重な資料である。まさに稻荷台遺跡的な遺物であるといえよう。平安時代の土器総体をみたところでは、稻荷台遺跡の中心部と時期的にはほとんど相違は認められない。9世紀中葉から10世紀にかけてを中心とする時期の所産であると思われる。

48は平瓦でカマドの構築材として使用されたと考えられる。49は凝灰岩製の砥石である。

50～55は鉄製品である。50は性格不明であり、重量感がある。51・54は釘である。52は14トレンチ内の土壌墓と思われる土坑から出土した短刀である。53も同一遺構からの出土であり、52と同一個体の可能性があるが、接合しなかった。刃身は長さ20.6cm、幅2.0cm、厚さは0.5cmである。関は両関と思われるが、刃部側の関は錆により判然としない。茎は残存部で長さ7.6cmであり、直径約0.6cmの目釘孔が一箇所確認されている。55は細い屈曲した鉄製品であるが、性格不明である。なお、図示し得なかったが、鉄滓・銅滓が少量出土している。

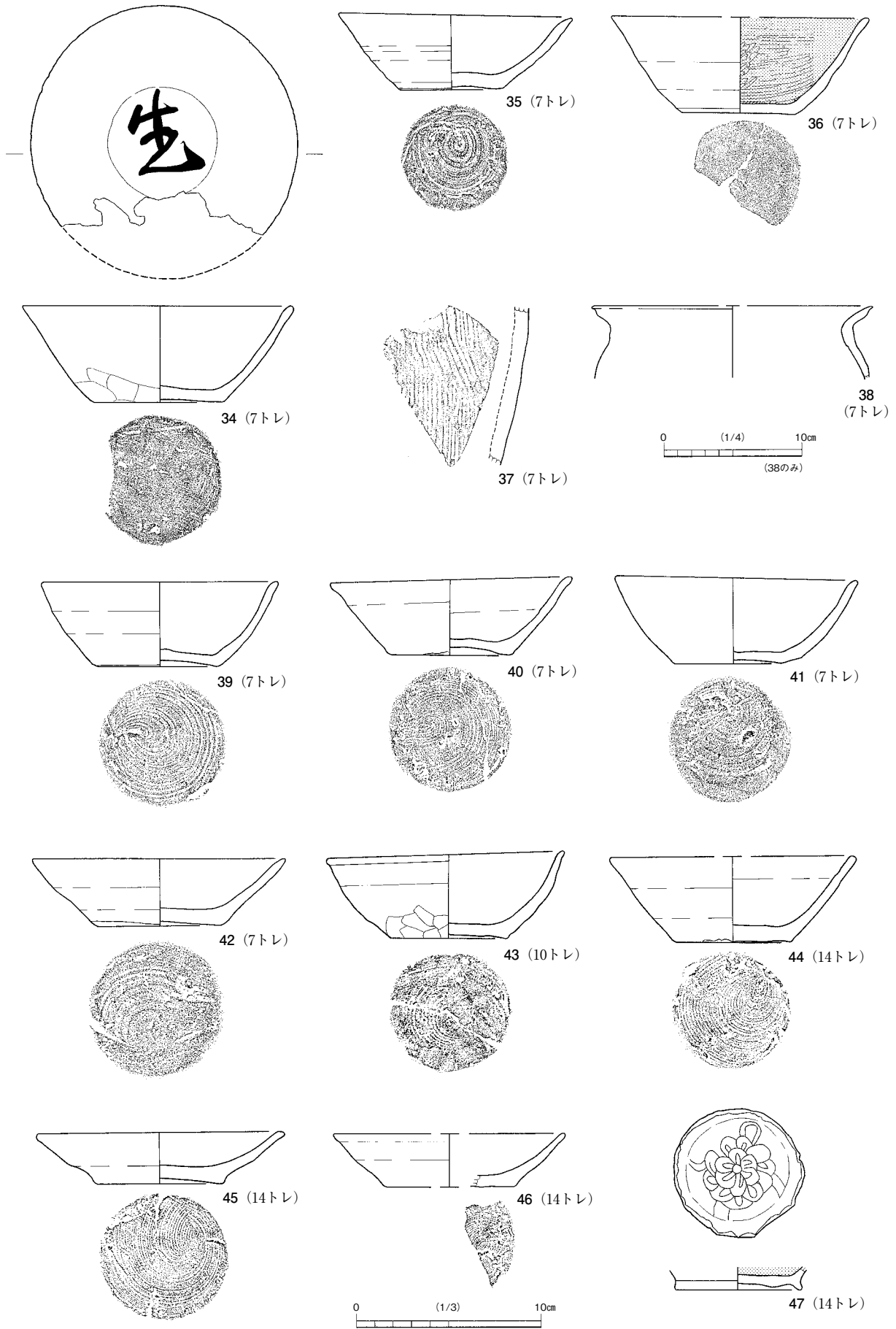
以上のように今回の調査地点は弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡、平安時代の集落跡を中心とする。そのなかで、平安時代の集落跡は、時期的には稻荷台遺跡の中心部と時期的に一致する点、暗文花文

稲荷台遺跡L地点



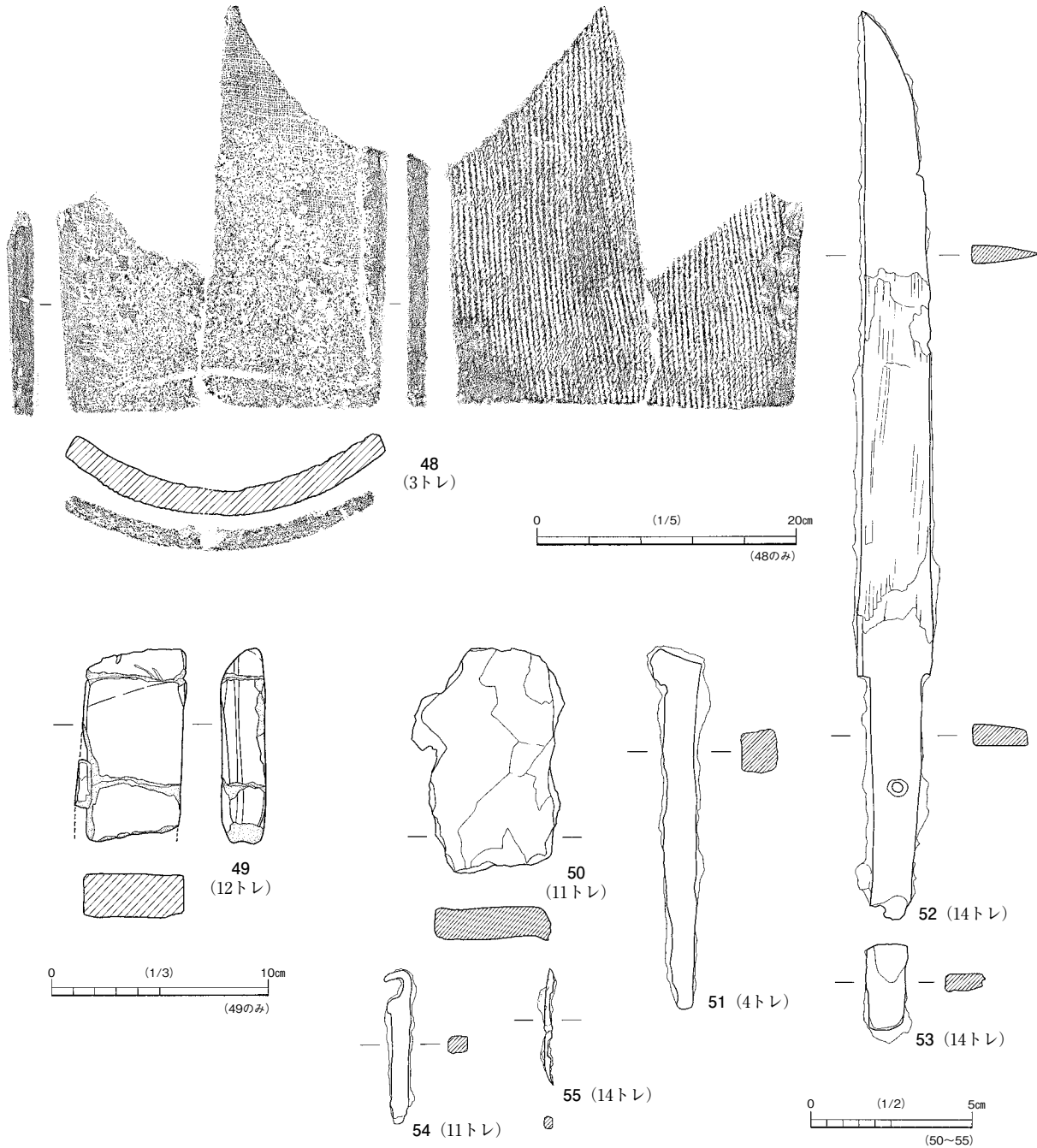
第12図 出土遺物(1)

稲荷台遺跡L地点



第13図 出土遺物(2)

稲荷台遺跡L地点



第14図 出土遺物(3)

土器といった特異な土器が出土する点、掘立柱建物跡の存在が確認される点などから、国府関連遺跡である稲荷台遺跡の一部と見て間違いのないであろう。おそらくは中心部の建物群の維持・管理に携わった人々の居住域であったのではないかとと思われる。

文 献

- 鶴岡英一 2000「稲荷台遺跡」『平成11年度 市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 浅利幸一他 2003『市原市稲荷台遺跡』市原市文化財センター調査報告書 第83集
- 牧野光隆 2003「稲荷台遺跡」『平成14年度 市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 櫻井敦史 2006「稲荷台遺跡K地点」『平成17年度 市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会

5 姉崎二子塚古墳

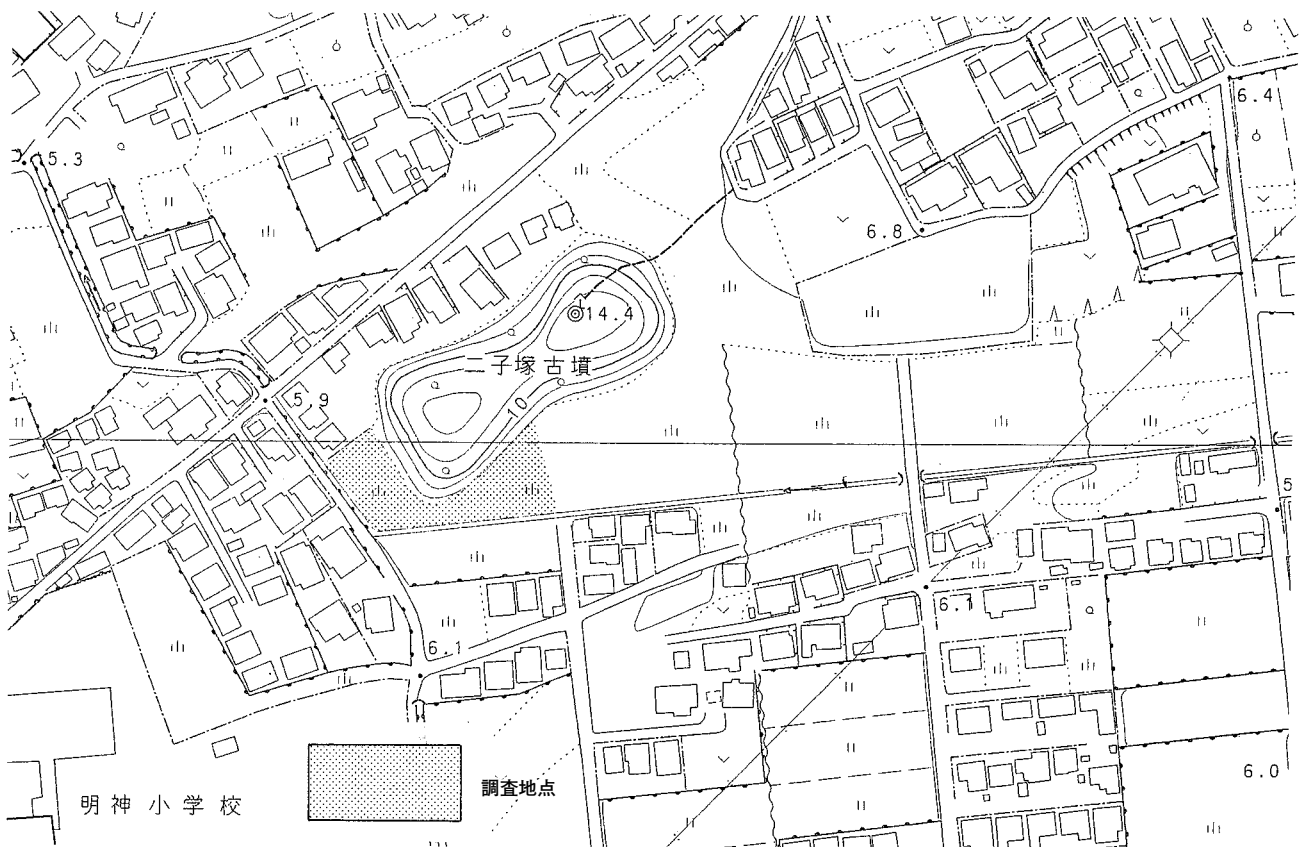
遺跡の位置

広義の姉崎古墳群は、今富から姉崎地区に分布する総数13基の大型・中型墳を主体とし、『国造本紀』における「上海上国造」と、その前身豪族の奥津城として捉えられている。県指定史跡でもある中期の姉崎二子塚古墳は、標高5.5m前後の砂丘帯上に単独で存在し、周囲の台地上に存在する県内前期最大規模の姉崎天神山古墳や、100m級の釈迦山古墳、後期の山王山古墳や鶴窪古墳などの大型前方後円墳等とは立地条件を異にして存在しているものと捉えられていた。最近になって、姉崎上野合遺跡・妙経寺遺跡・山新遺跡などの隣接地の調査が進み、低地に所在する古墳群の所在が次第に明らかになると、これら群集墳の盟主的存在として姉崎二子塚古墳が注目される。

調査概要

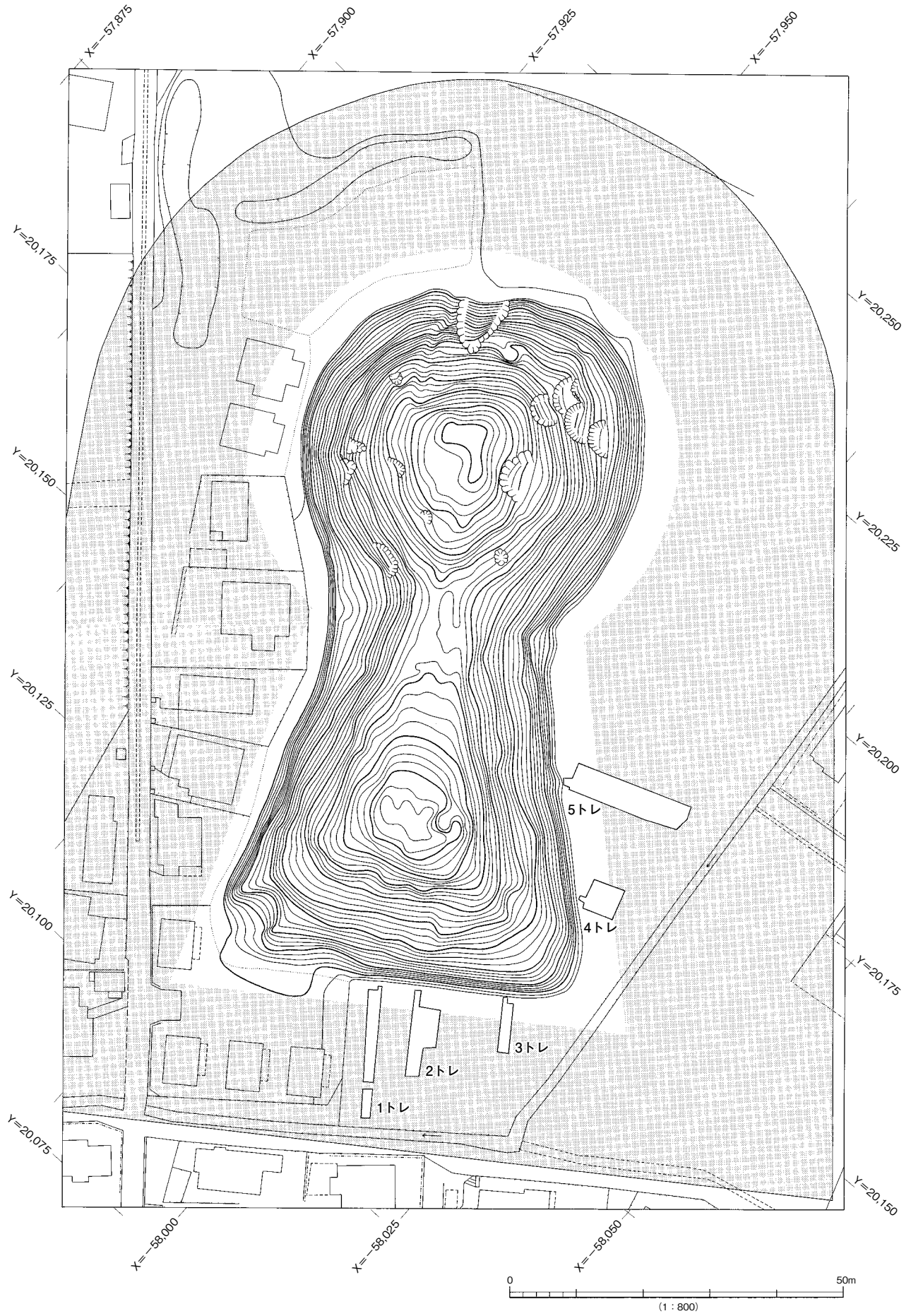
今回の調査区は、前方部前面を含んだ範囲が対象地であり、現状墳丘の5m外側に本来の墳丘裾部の輪郭線が巡る説もあり、保存目的を前提とした確認調査として、対象地区内に5箇所のトレンチを設定し、前方部前面側から括れ部方向に向かってそれぞれ1～5の番号を付し、周溝範囲とその立ち上がり捉えることを前提として調査を開始した。また、これと併行して墳丘の詳細データを得るため、調査対象地の墳丘裾部に対して10cmコンター図を作成した。

調査時の地下水位は高く、地表面を掘下げると堰を切ったかのような激しい湧き水が墳丘側から生じ、調査は困難を極めた。結果として、現状墳丘盛土側に立上る地山黄～青灰色砂層は、全ての設定トレンチ

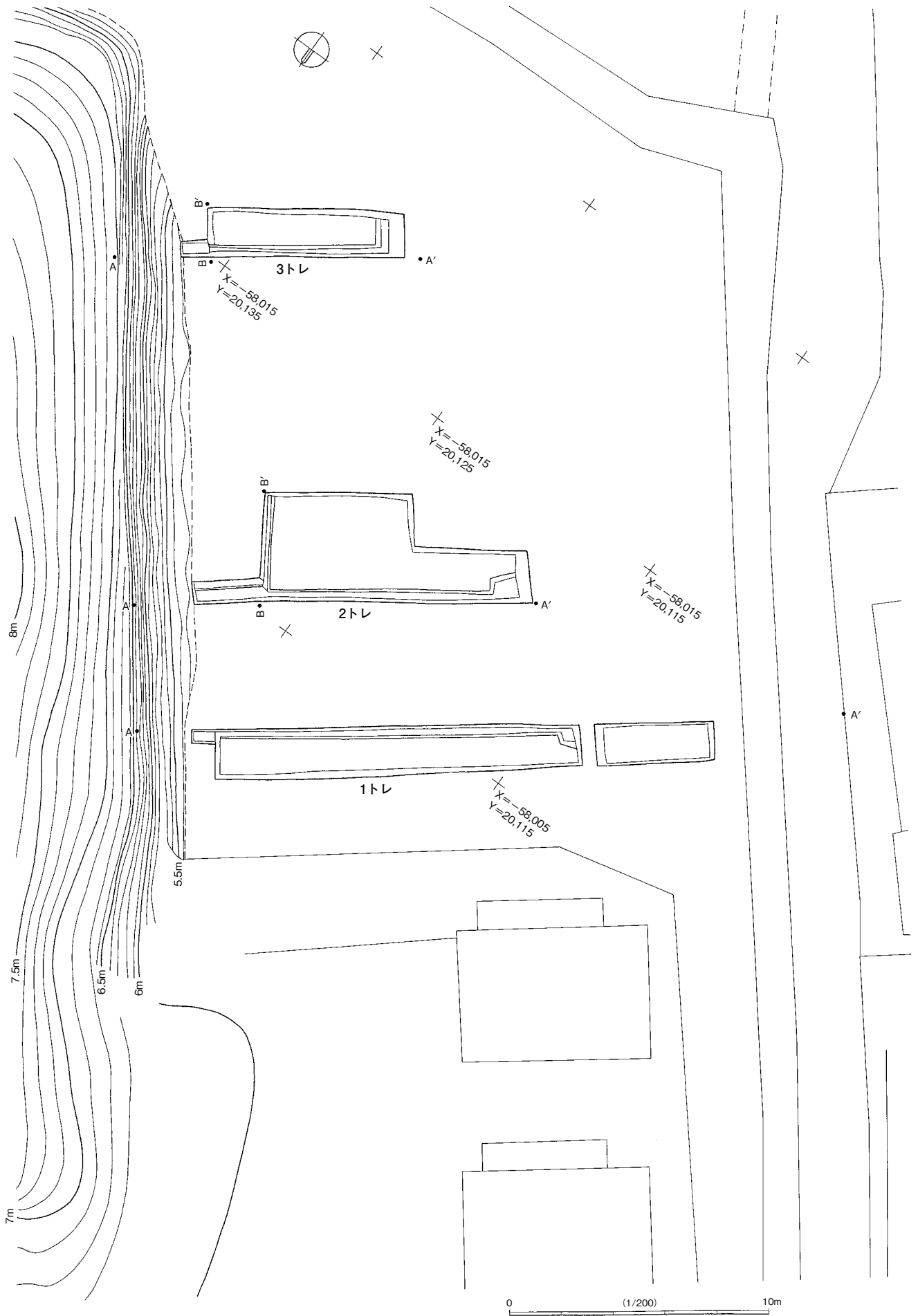


第15図 姉崎二子塚古墳調査位置図

姉崎二子塚古墳



第16図 姉崎二子塚古墳 (『千葉県歴史 資料編考古2』より 一部改変・転載)



第17図 トレンチ配置図(1)

から現墳丘の延長上に検出された。また、自然堆積の状況を示す周溝と想定される黒色有機質砂主体層は、基本的には平成17年度調査時と同様の堆積状態を示す(註1)。また、現状墳丘5 m外側にあるとされる輪郭線の痕跡(註2)は、全てのトレンチから検出することが出来なかった。

遺物は全てのトレンチから検出され、遺物総数は355点9,278.5 gに達した。中でも円筒埴輪片が多く、その総数は309点、重量8,258 gである。なお、出土遺物の大半は、何らかの形で磨耗している。おそらく地下水の影響を受けたのであろう。

遺構と遺物

1 トレンチ 遺物は68点1,749 gが検出され、内22点を図示した。出土遺物の大半は墳丘裾部側から検出され、特に拡張部では30点635 gの円筒埴輪片が検出されている。1-1、1-2、1-10は外面赤彩が施されている。1-14~22は、墳丘側の拡張部から検出され、18・20には外面赤彩が施される。

墳丘側の周溝の立ち上がりは、現墳丘勾配の延長上に存在し、道路側の立ち上がりは未検出である。

2 トレンチ 遺物は総数74点、2,034.6 gが検出され、内26点を図示した。殆どが円筒埴輪片であるが、他に獣骨片1点が検出されている。墳丘側の狭い拡張部からは、41点750.6 gの遺物が集中的に検出され、遺物密度が高い。内訳は35点714 gの埴輪片、5点35 gの土師器、1点1.6 gの獣骨片である。円筒埴輪片の中には赤彩品が散見し、2-1・2-4、墳丘側拡張部出土の2-18~26の内20・26には外面赤彩が施される。また写真図版9-③は獣骨である。

現状墳丘5 m外側の輪郭線を確認するため、広めにトレンチ設定を行なったが、平面・断面とも輪郭線を確認することは出来なかった。墳丘側の周溝の立ち上がりは、現墳丘勾配の延長上に存在し、覆土は自然堆積の状況を示し、人為的な落ち込み等は存在しない。

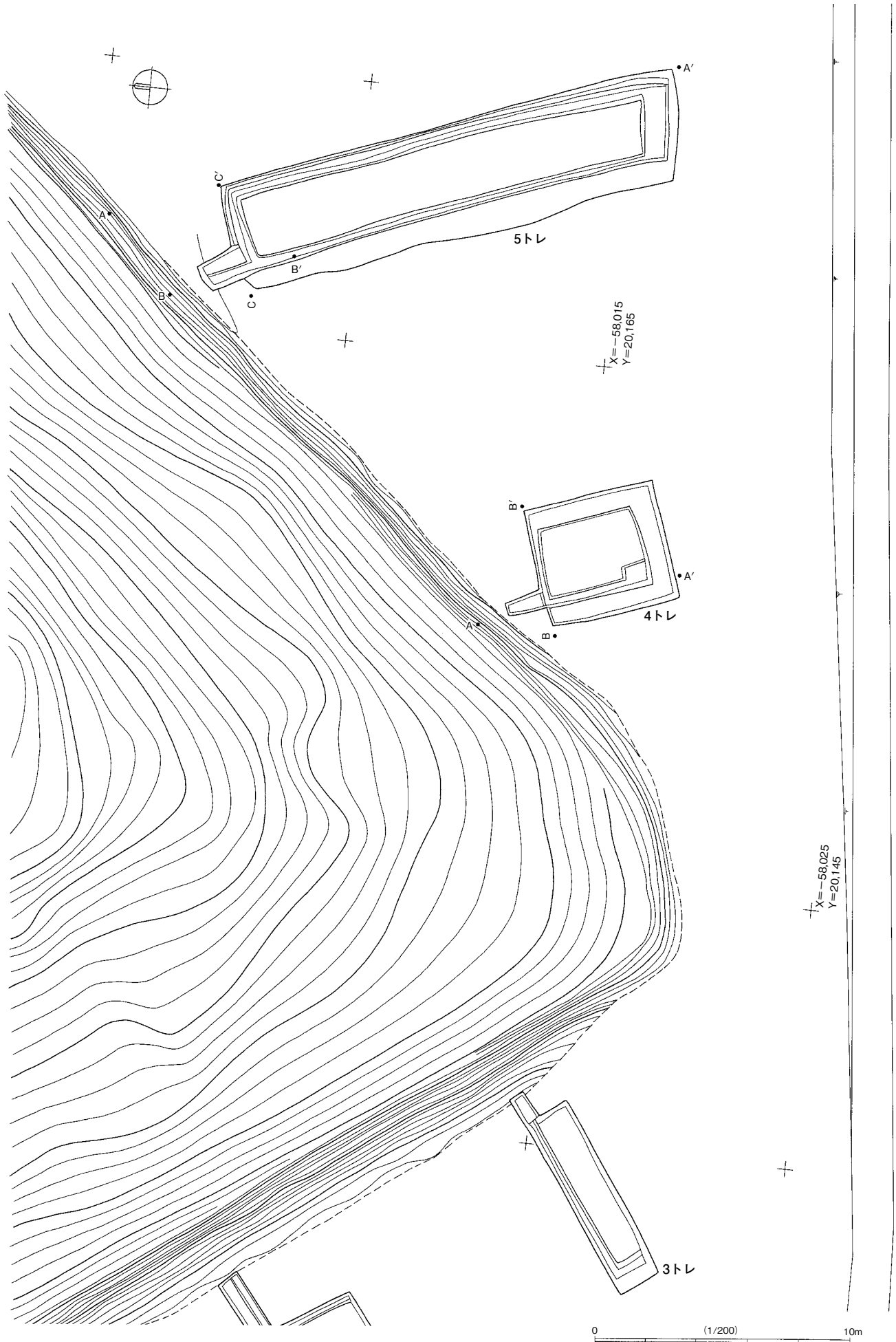
3 トレンチ 遺物は24点651 gが検出され、内9点を図示した。殆どが円筒埴輪片であり、他に1点10 gの土師器、1点29 gの馬歯を検出している。3-4、6・7・8には外面赤彩が施されている。写真図版9-①は馬歯であり、5トレンチ検出の馬歯と酷似する。墳丘側の周溝の立ち上がりは、現墳丘勾配の延長上に存在する。なお、当トレンチより西側は近年厚さ0.6~0.8mにも達する客土が施されており、本来の墳丘裾部は埋没していた。

4 トレンチ 遺物は56点897 gが検出され、内10点を図示した。殆どが円筒埴輪片であり、他に7点219 gの土師器が検出されている。4-1は細身高坏脚部で外面篋ミガキ・内面篋ナデが施されている。円筒埴輪の5には外面赤彩が施されている。墳丘側の周溝の立ち上がりは、現墳丘勾配の延長上に存在する。当トレンチ周囲は厚さ0.8mの客土が施されており、本来の墳丘裾部は埋没していた。

5 トレンチ 遺物は133点3,946.9 gが検出され、内48点を図示した。殆どが円筒埴輪片であるが、9点259 gの土師器、1点10 gの縄文土器、2点26 gの弥生土器、1点22.3 gの馬歯、1点0.6 gの桃の種が検出されている。この内57点1,695 gの埴輪片と1点195 gの高坏、馬歯、桃の種は、墳丘側の拡張部から出土し、拡張部の遺物密度は高い(5-1~18)。拡張部土層断面に突き刺さって検出された土師器5-1は高坏脚部で、内外面篋ナデが施されている。磨耗やや激しく、不明瞭ながら外面には縦篋ミガキが施されたような痕跡が残存する。19はその傾き具合から朝顔形埴輪と想定され、下端部には縦ハケを施した後、横方向に沈線を入れタガを貼り付けた痕跡が認められる。30・38は縦ハケ後横ハケが施された製品であり、12・38は外面赤彩が施されている。

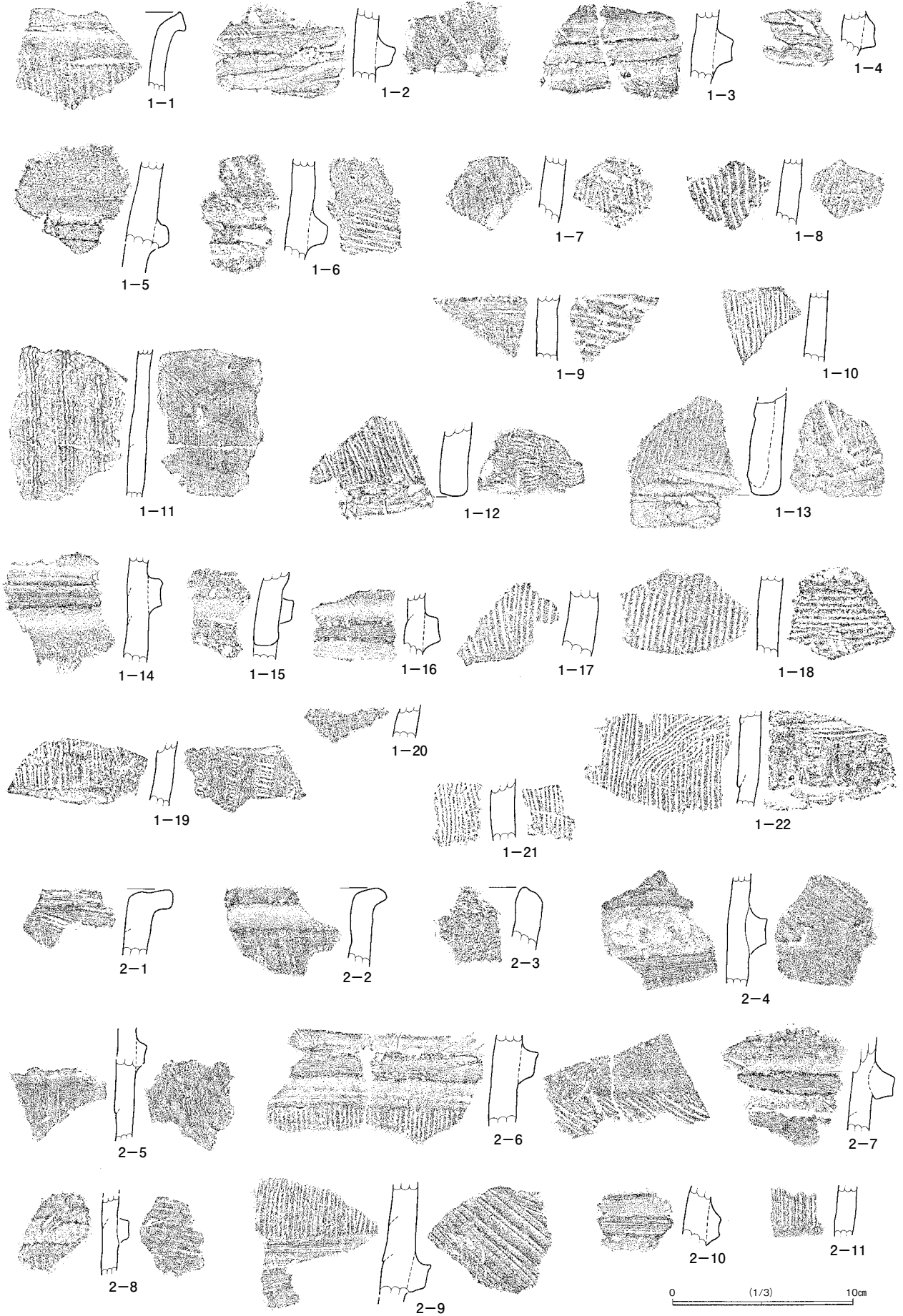
墳丘側の周溝の立ち上がりは、現墳丘勾配の延長上に存在する。当トレンチ周囲は近年厚さ0.8mの客

姉崎二子塚古墳



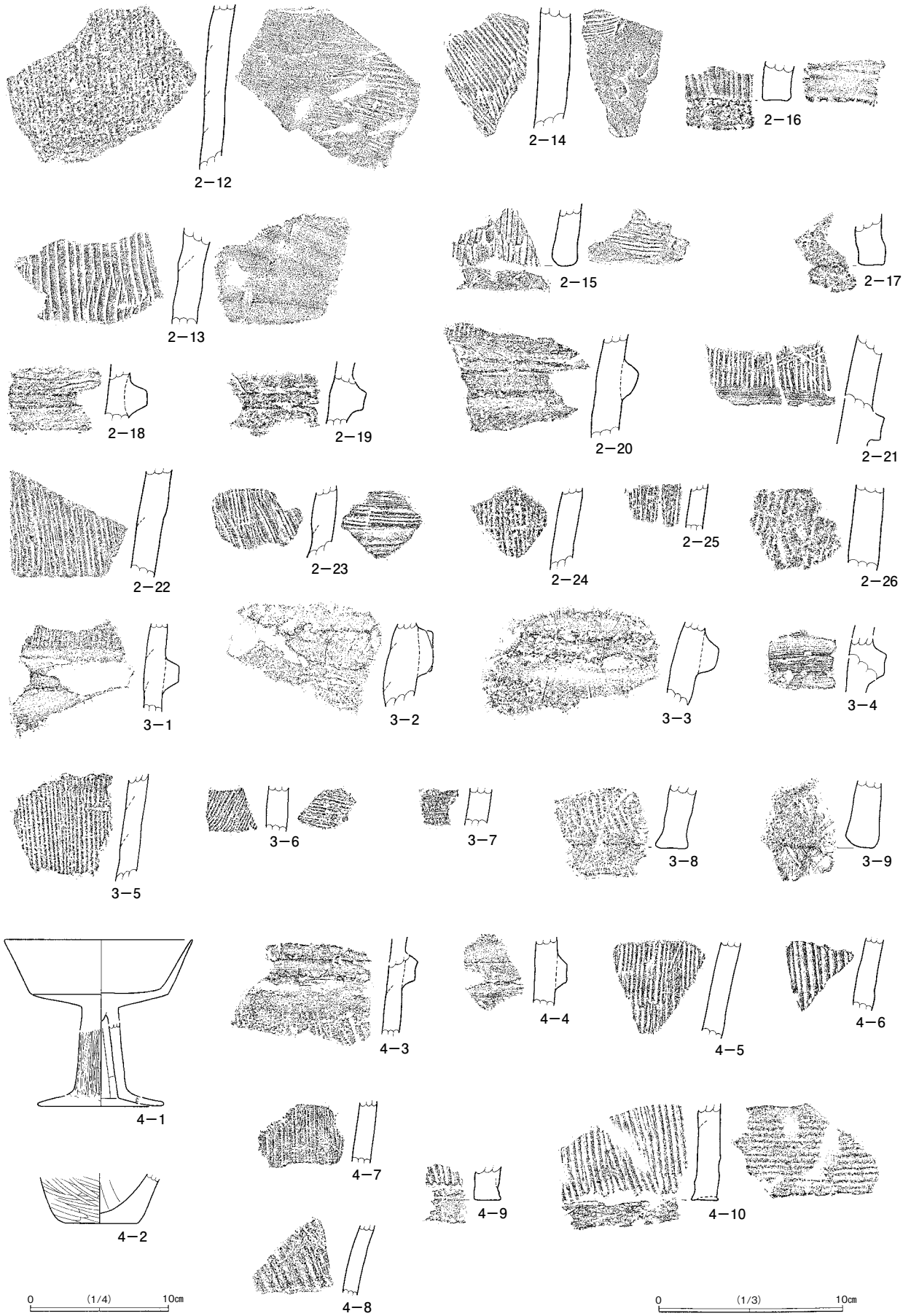
第18図 トレンチ配置図(2)

姉崎二子塚古墳



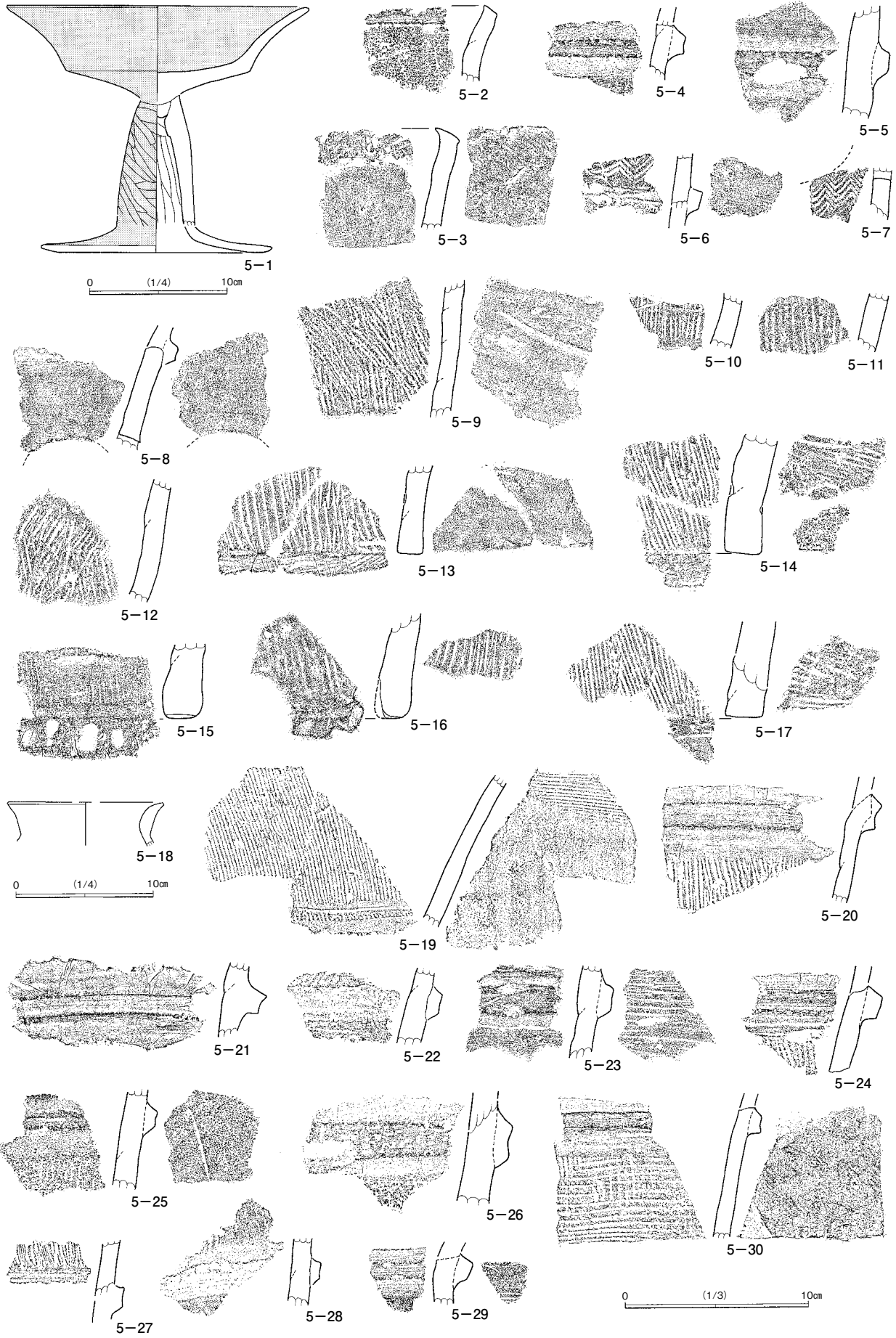
第20図 出土遺物実測図(1)

姉崎二子塚古墳



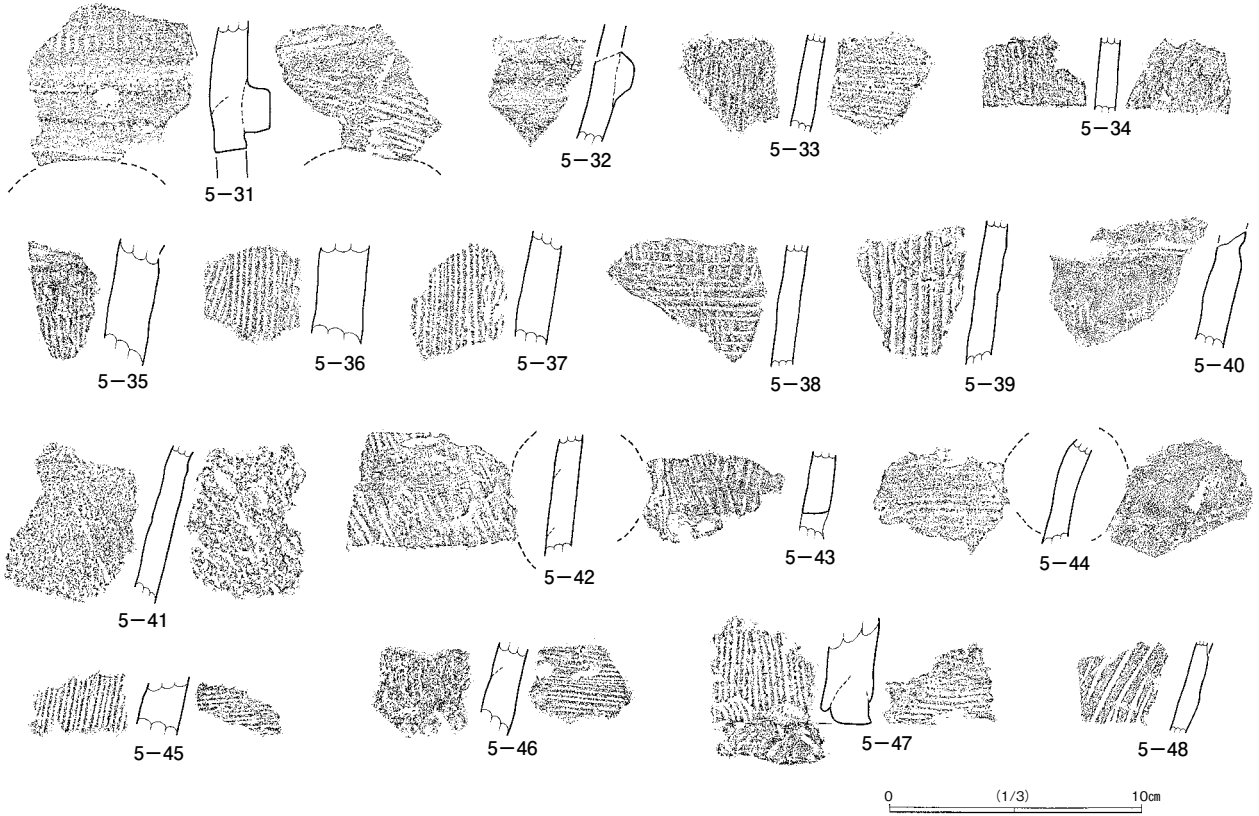
第21図 出土遺物実測図(2)

姉崎二子塚古墳

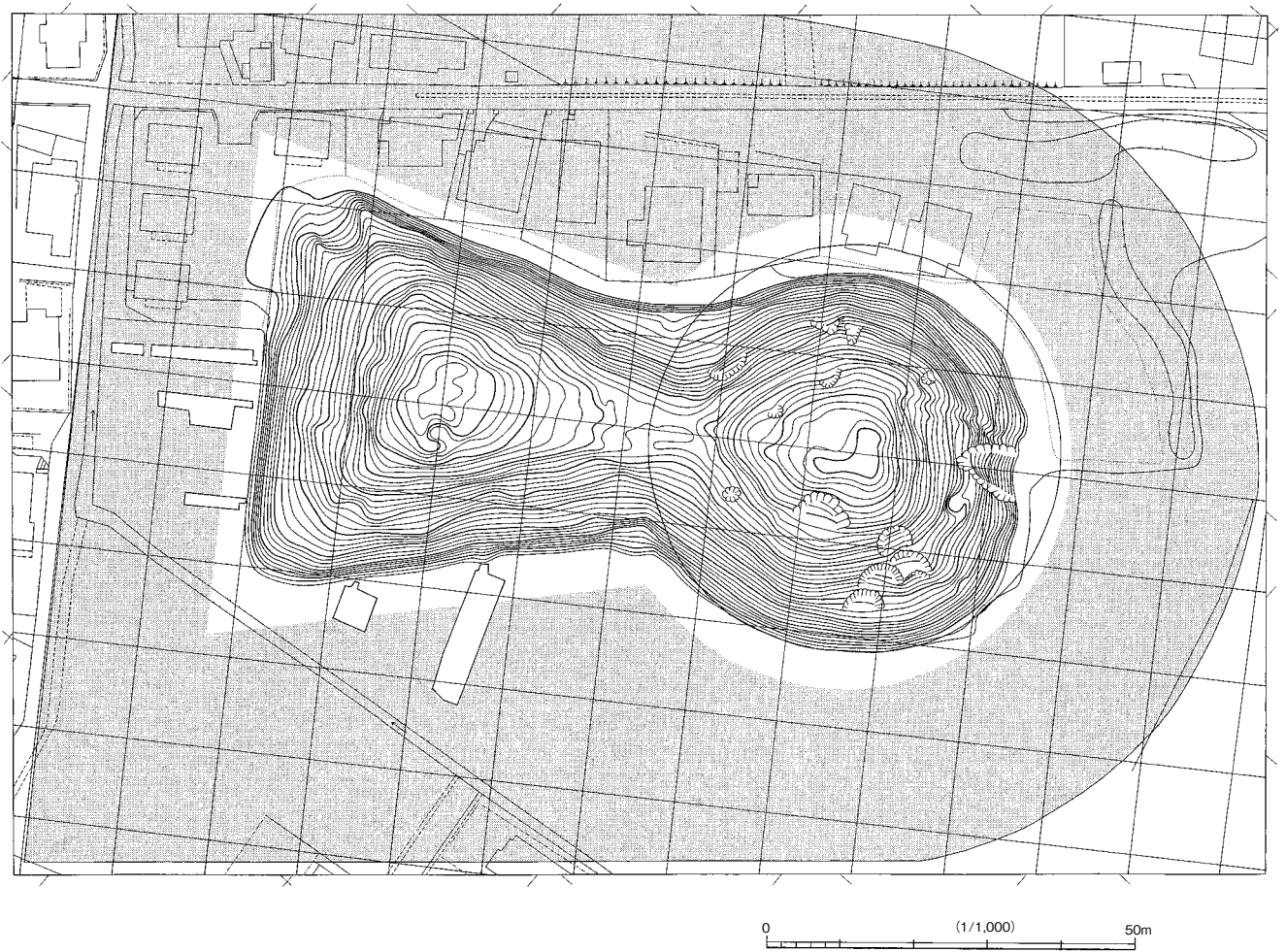


第22図 出土遺物実測図(3)

姉崎二子塚古墳



第23図 出土遺物実測図(4)



第24図 姉崎二子塚復元図 (第16図に加筆 転載)

土が施されており、本来の墳丘裾部は客土によって埋没していた。

墳丘規模

姉崎二子塚古墳の規模については、正確な墳丘測量図と航空写真を基に、白井久美子が復元を試みており、現状墳丘の5 m外側に本来の墳丘裾部の輪郭線が巡ることを根拠に長軸長114mの前方後円墳とする案が提示されている(註3)。しかし、今回の確認調査によって、輪郭線は平面的にも断面的にも観察する事が出来なかった。1974年撮影の航空写真に写るソイルマークは、おそらく撮影当時の地下水位を表したものであろう。

現存する墳丘の北側には住宅が進出し、墳丘は築山状に開墾され、本来の墳丘を留めていない。今回の調査で得られた墳丘側の周溝の立ち上がりは、現墳丘勾配の延長上に存在するのであれば、少なくとも住宅進出の及んでいない未調査地点もまた現墳丘勾配の延長上に存在するものと想定することが可能である。そうすると第24図に示すように、後円部径は後円部北側の畑境界線とほぼ一致するライン上に想定され、当時の1尋を155cm前後、1区約8尋と仮定すれば、後円部径を55m前後(約4.4区35.5尋)、全長110m前後(約8.8区71尋)に復元可能であり(註4)、従来の定説に近い。

出土遺物について

今回の調査範囲内からは、総数は309点、重量8,258 gの埴輪片が検出された。これらの円筒埴輪片は、その器厚を①0.8～1 cm、②1.4～1.6cm、③1.8～2.0cm前後の3タイプに分類できる。この内、外面赤彩を施す製品は3タイプ全てに存在することが確認された。しかし、外面に横ハケが施され且つ赤彩されるものは、今回の調査では①のタイプに2点しか確認されず、また、2点とも静止痕を認めることは出来なかった。

タガ形状はM字形と台形の両者が認められるが、M字形タガの方が圧倒的に多く、また、台形タガを有する製品の中には、分厚く鈍重で脆い造りの一群が存在している。口縁部形態には、2-1のように逆L字状に横方向に強く飛び出すもの、2-2のように横方向に突出するもの、1-1のように外反して端部に面を持つもの、2-3のように直立するもの、など4タイプを認めることが出来た。また、5-6・5-7のようにハケ状工具による山形文や、1-22のような変則方向にハケが入るものなど、かなり地方色が強い在地的な製品が散見する。

一方、出土土器については貧弱と言わざるを得ないが、5トレンチ拡張部出土の高坏脚部は、その造りから中期和泉式高坏と捉えられ、大場報告による「前方部上段埴輪列出土高坏」(註5)とほぼ同時期の所産と想定することが可能であろう。またこの高坏脚部に類似する比較的大形な製品は、周辺では姉崎上野合遺跡2号遺構や安須2号墳等から出土しており、既に報告済みの埴輪や鉄鏃等の他の出土品を加味して考えると、姉崎二子塚古墳の築造年代は、5世紀の中葉に近い前半代、すなわちTK-73型式後半からTK-216型式併行期に想定することが可能であろう。

註及び引用参考文献

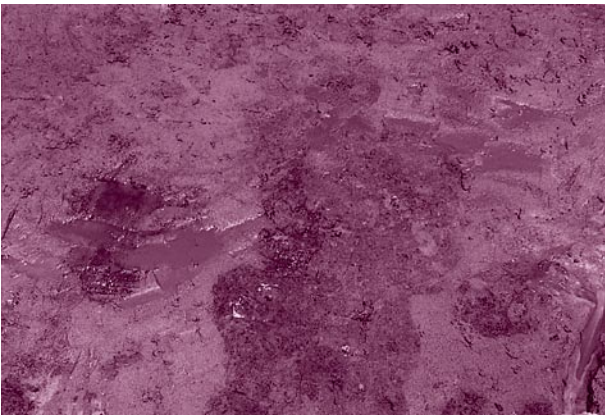
- 註1 忍澤 成視 2006「姉崎二子塚古墳」『平成17年度市原市内遺跡発掘調査報告』 市原市教育委員会
 註2 白井久美子 2003「姉崎古墳群」『千葉県の歴史 資料編考古2』 千葉県
 註3 白井久美子 註2に同じ
 註4 木對 和紀 2004「東関山古墳」『平成15年度市原市内遺跡発掘調査報告』 市原市教育委員会
 註5 大場磐雄ほか 1951「上総国姉崎二子塚調査概報」『考古学雑誌』 第37巻3号日本考古学協会



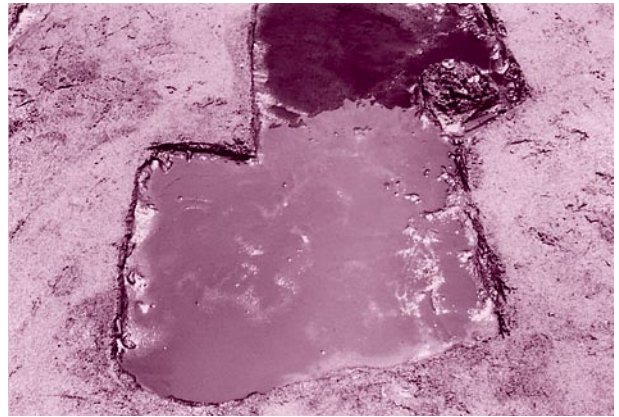
調査前風景



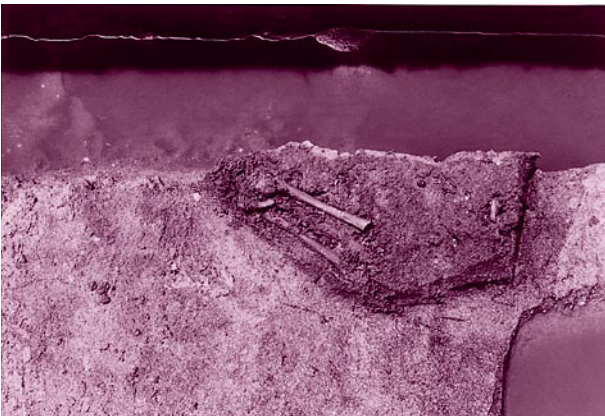
調査区全景



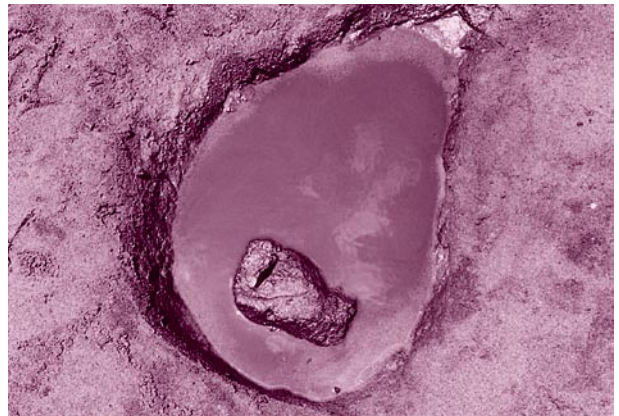
遺構確認状況（3号方形土坑）



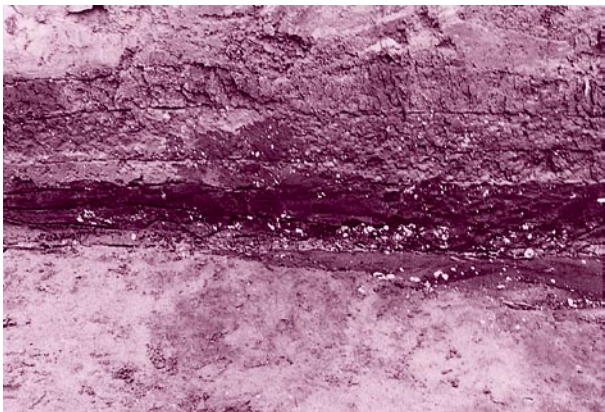
3号方形土坑検出状況



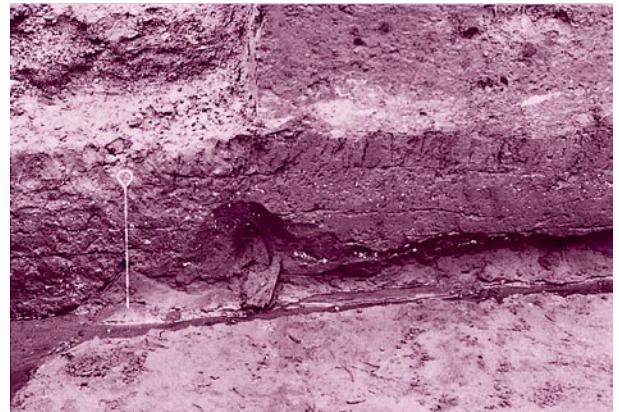
4号土壙墓人骨出土状況



5号土坑検出状況



貝層断面（調査区南壁）

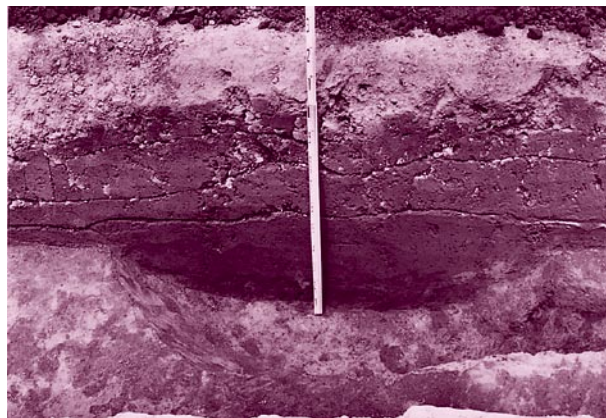


貝層及び木材出土状況（調査区西壁）

図版2 海士遺跡群三入道地区



調査前風景



4 トレンチ周溝検出状況



6 トレンチ住居跡検出状況



6 トレンチ遺物出土状況



7 トレンチ住居跡検出状況



13 トレンチ遺構検出状況



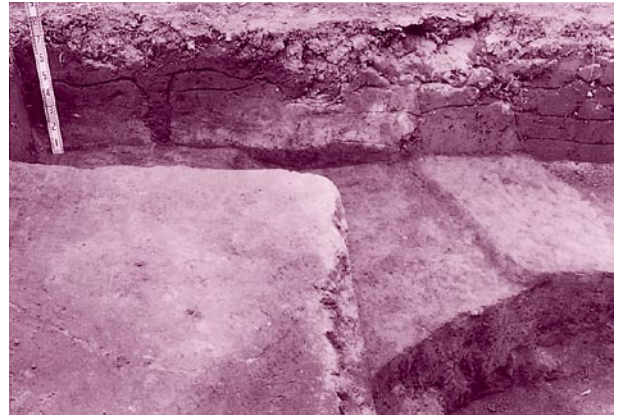
14 トレンチ遺構検出状況



15 トレンチ遺構検出状況



トレンチ設定状況



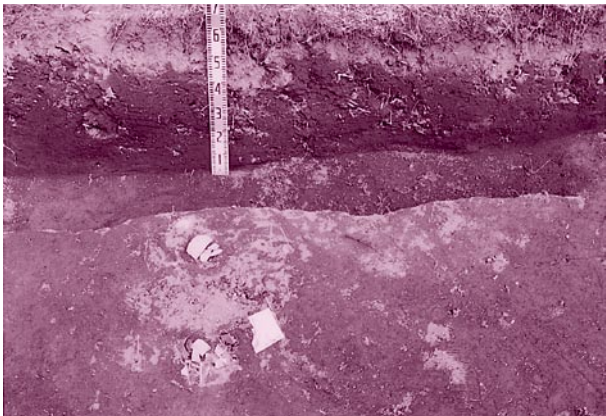
1 トレンチ遺構検出状況



3 トレンチ遺構検出状況



4 トレンチ遺物出土状況



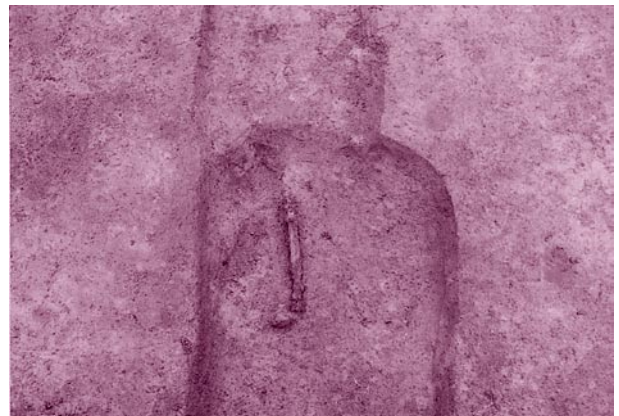
7 トレンチ遺物出土状況



7 トレンチ遺構検出状況



8 トレンチ柱穴確認状況



14 トレンチ短刀出土状況

図版4 姉崎二子塚古墳



1 トレンチ



2 トレンチ



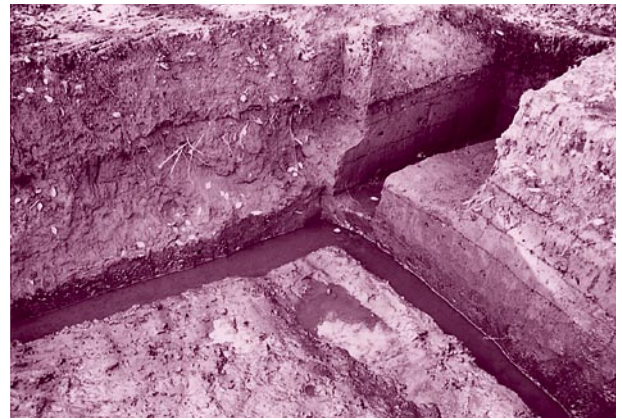
2 トレンチ拡張部



3 トレンチ拡張部



4 トレンチ拡張部



5 トレンチ拡張部

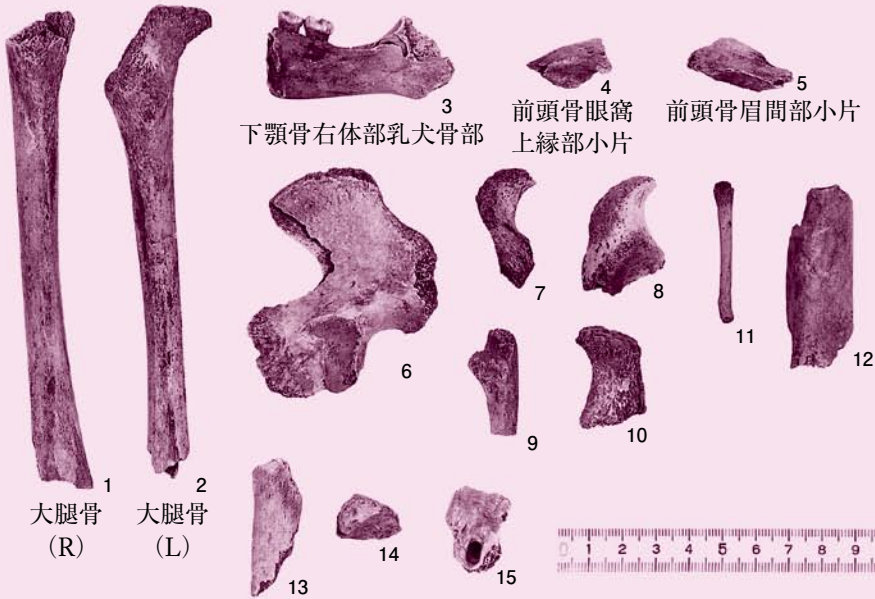
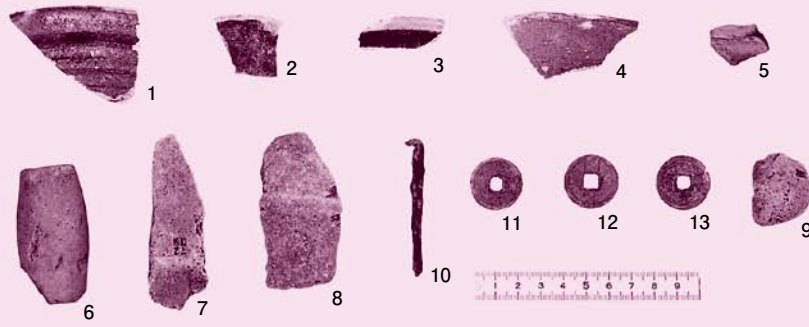


5 トレンチ作業風景

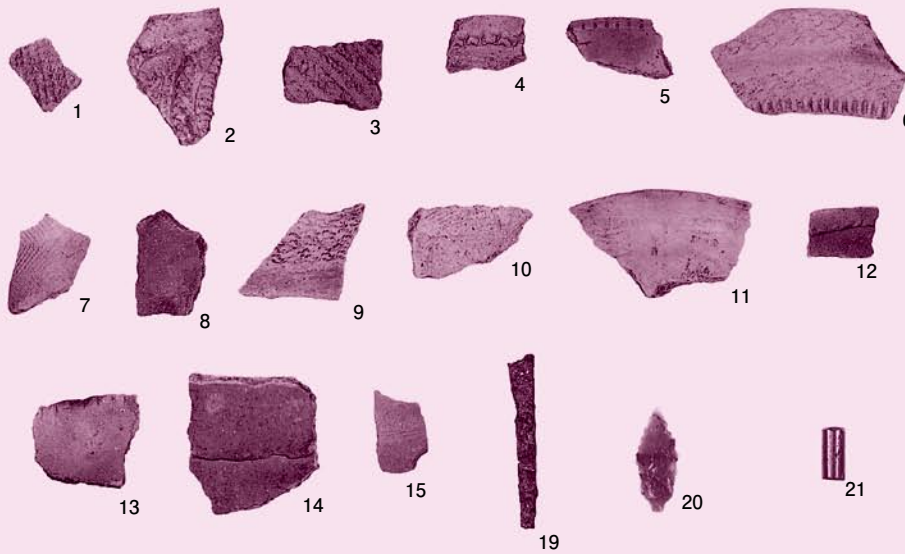


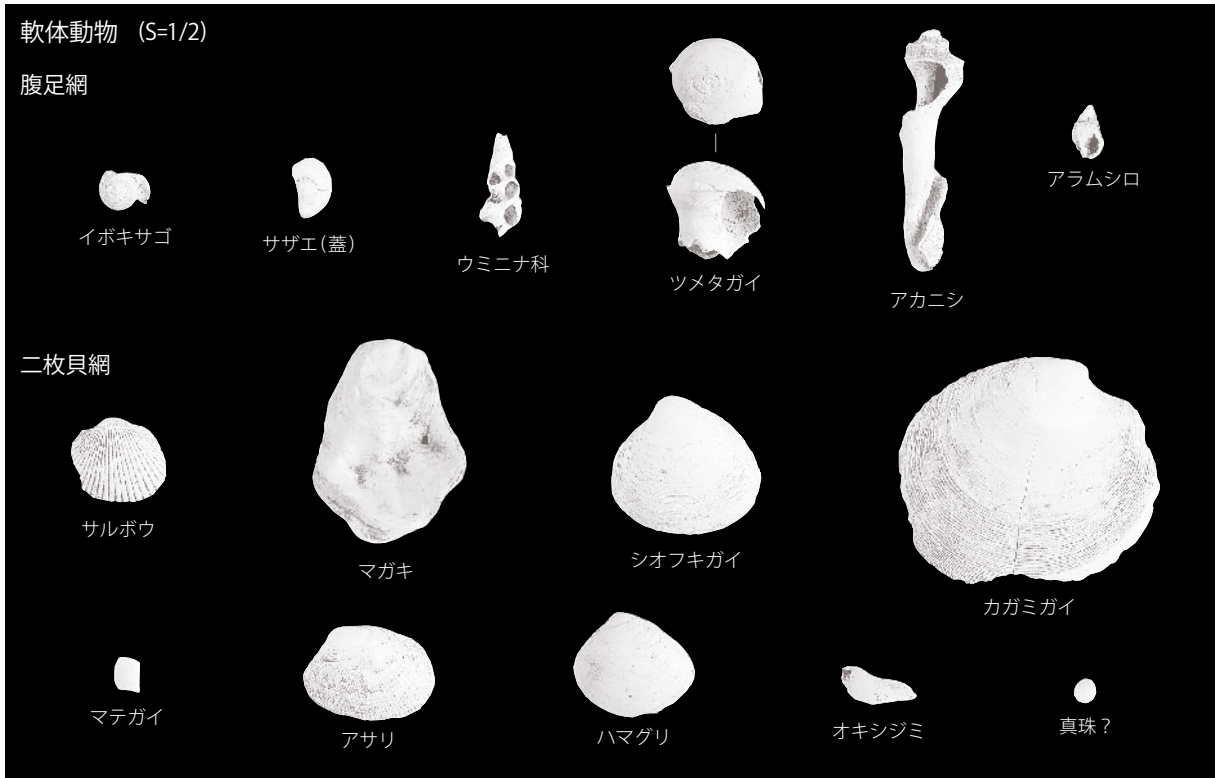
作業風景

棗塚遺跡出土遺物



海士遺跡群三入道地区
 出土遺物

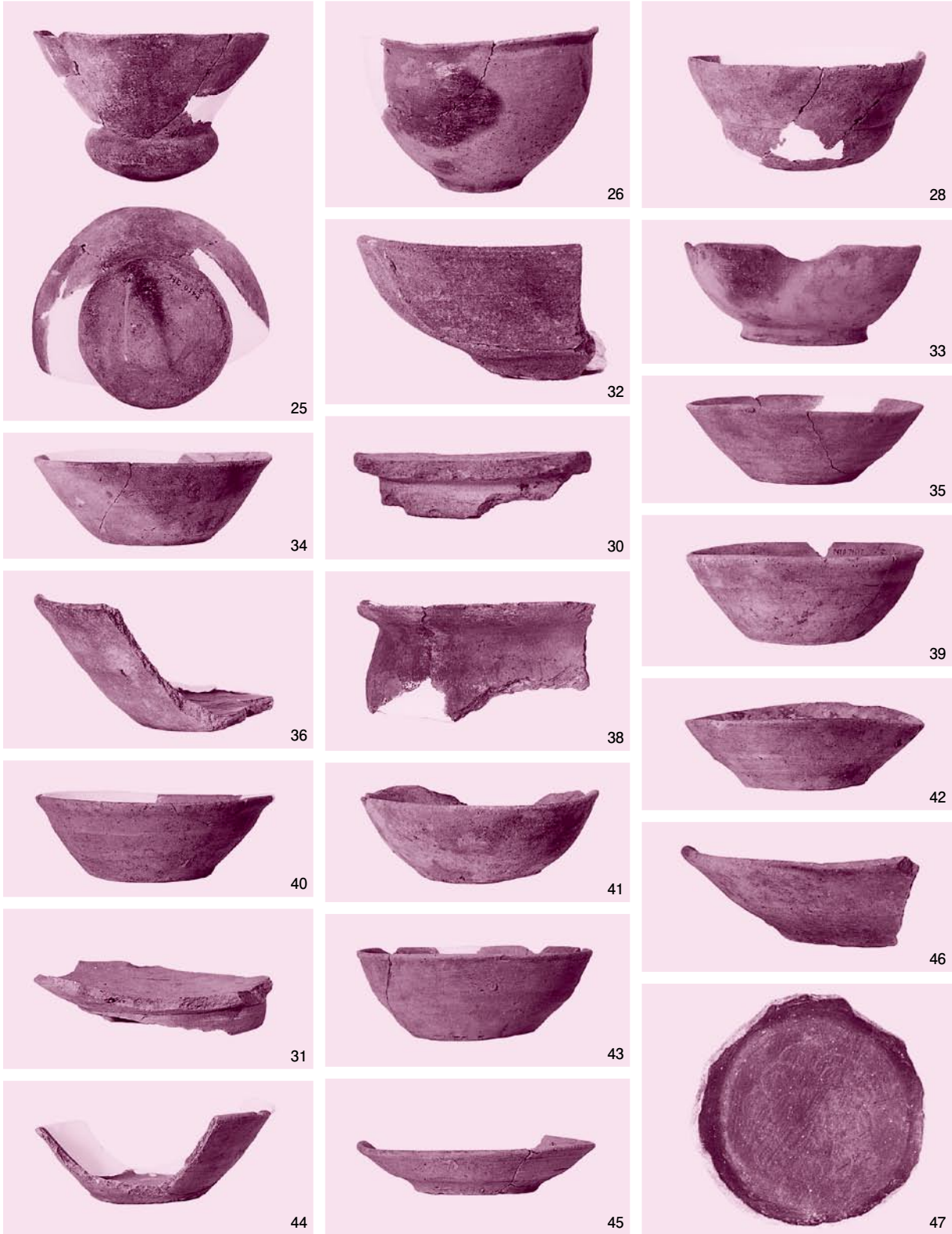




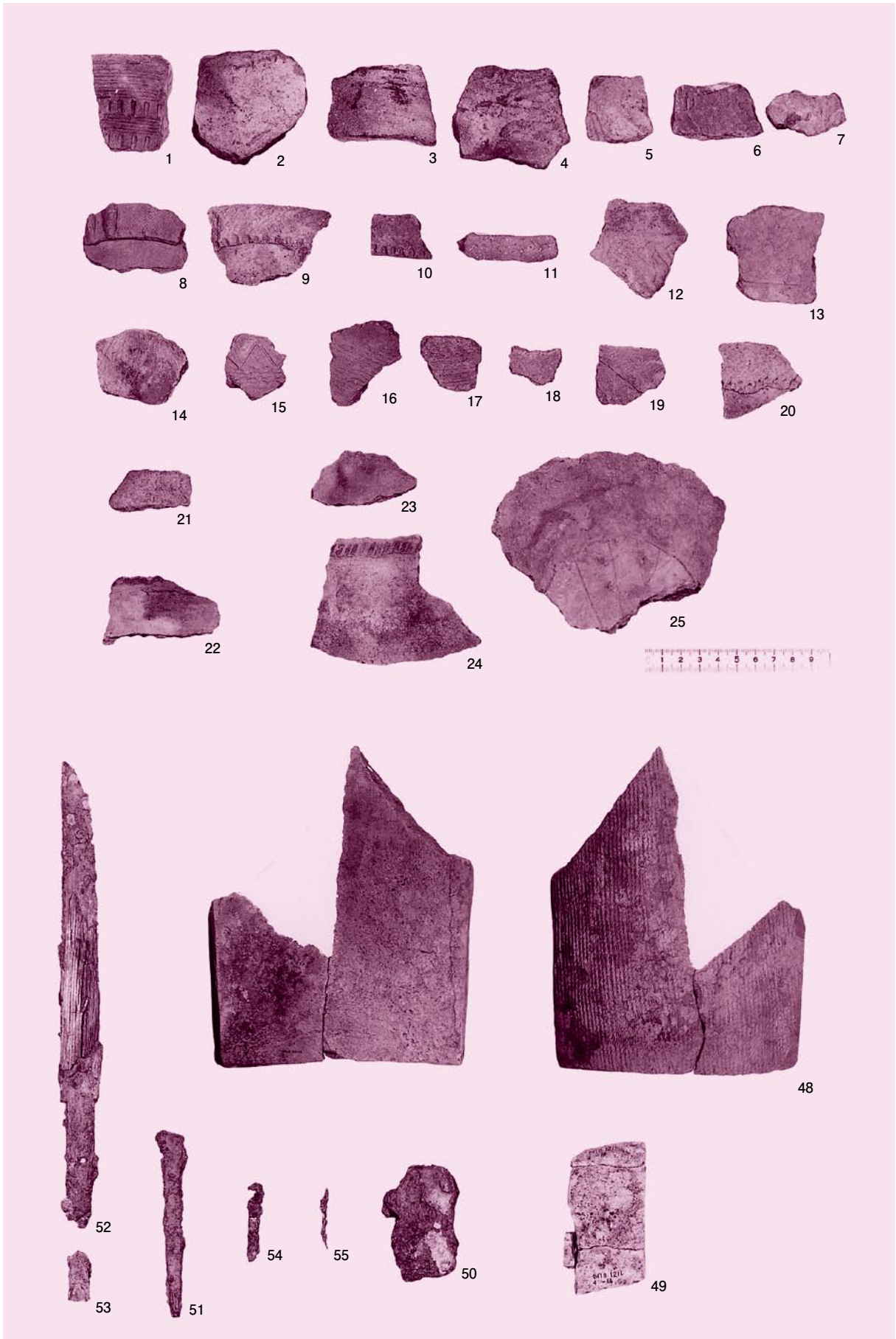
棗塚遺跡出土動物遺存体等



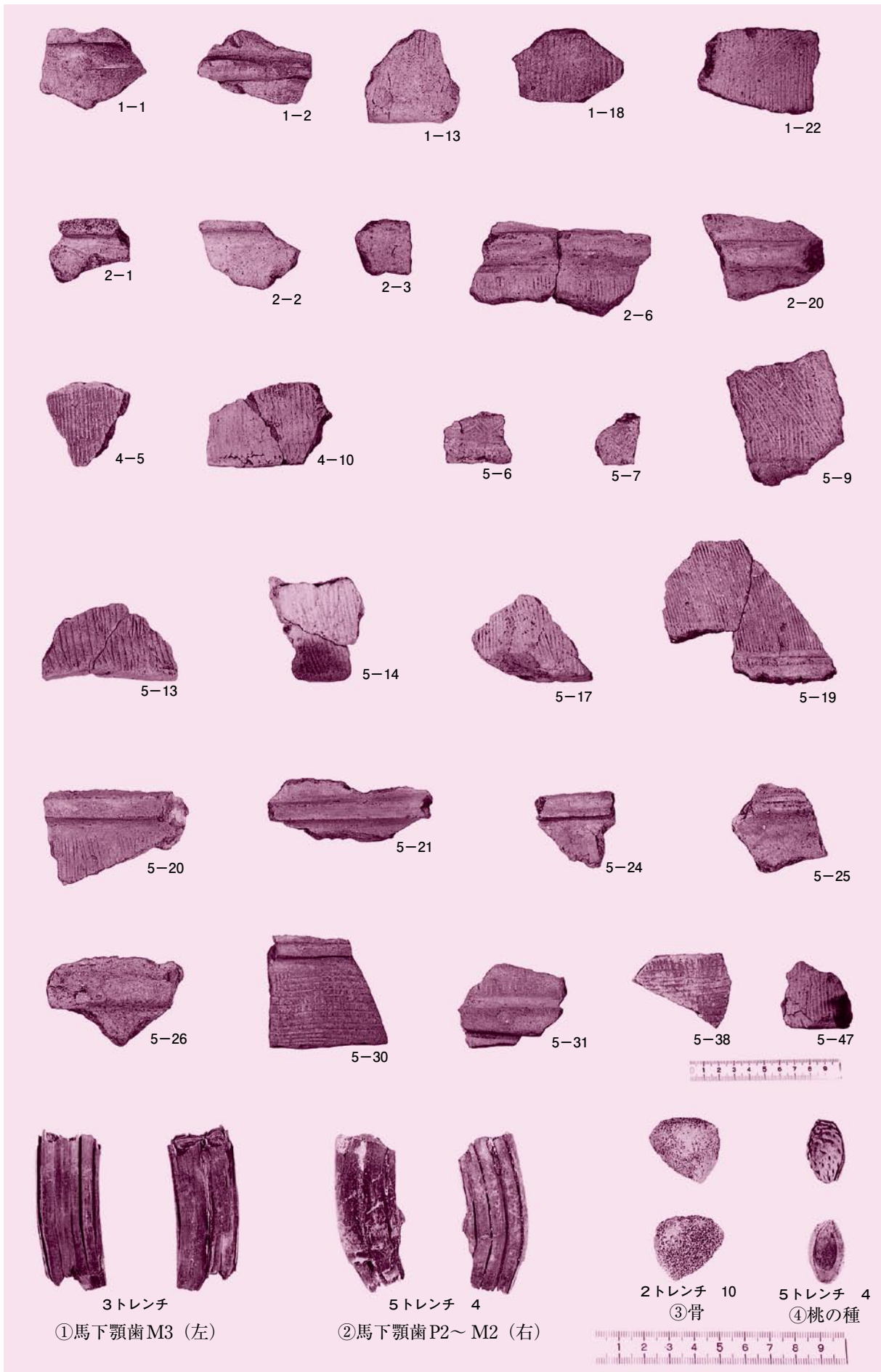
海土遺跡群三入道地区出土遺物



稻荷台遺跡L地点出土遺物



稻荷台遺跡L地点出土遺物



姉崎二子塚古墳出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいせい18ねんどいちほらしないいせきはくつちょうさほうこく							
書名	平成18年度市原市内遺跡発掘調査報告							
副書名	藁塚遺跡・海土遺跡群三入道地区・稲荷台遺跡L地点・姉崎二子塚古墳							
巻次								
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	木對和紀・鶴岡英一・高橋康男							
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436 (41) 9000							
発行年月日	2007年3月23日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
藁塚遺跡	市原市姉崎字神明 1921-1・2・3	12219	セ405	35° 28′ 38″	140° 02′ 59″	20060518 ～ 20060605	63㎡ (本調査)	個人住宅建設
海土遺跡群三入道地区	市原市福増字三入道 757-1・758-1	12219	セ406	35° 28′ 31″	140° 07′ 51″	20060601 ～ 20060608	130.3㎡/1,303㎡ (確認)	店舗建設
稲荷台遺跡L地点	市原市山田橋 3-11-17・18	12219	セ410	35° 30′ 22″	140° 07′ 20″	20060913 ～ 20061004	350㎡/3,500㎡ (確認)	宅地造成
姉崎二子塚古墳	市原市姉崎字二夕子 1725-1, 1726	12219	セ415	35° 28′ 48″	140° 03′ 06″	20061120 ～ 20061211	135㎡/1,227㎡ (確認)	保存目的の範囲内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
藁塚遺跡	集落	中世	土壙墓 土坑 貝層	中世陶器, 人骨, 貝, 魚骨, 獣骨				
海土遺跡群三入道地区	集落 古墳	弥生 古墳 平安	竪穴住居跡 8軒 古墳周溝 2基 竪穴住居跡 3軒	石鏃, 弥生土器, 管玉, 土師器, 灰釉陶器				
稲荷台遺跡L地点	集落	弥生 古墳 奈良 平安	竪穴住居跡 4軒 竪穴住居跡 4軒 竪穴住居跡 2軒 竪穴住居跡 15軒 掘立柱建物跡 6棟 土壙墓 1基	弥生土器, 土師器, 緑釉陶器, 灰釉陶器, 暗文花文土器, 短刀				
姉崎二子塚古墳	古墳	古墳時代中期	前方部墳丘裾部	円筒埴輪, 土師器, 獣骨				

平成18年度 市原市内遺跡発掘調査報告

平成19年3月23日発行

編集 市原市埋蔵文化財調査センター
市原市能満1489

発行 千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央1-1-1

印刷 株式会社 正文社
千葉県中央区都町1丁目10番6号